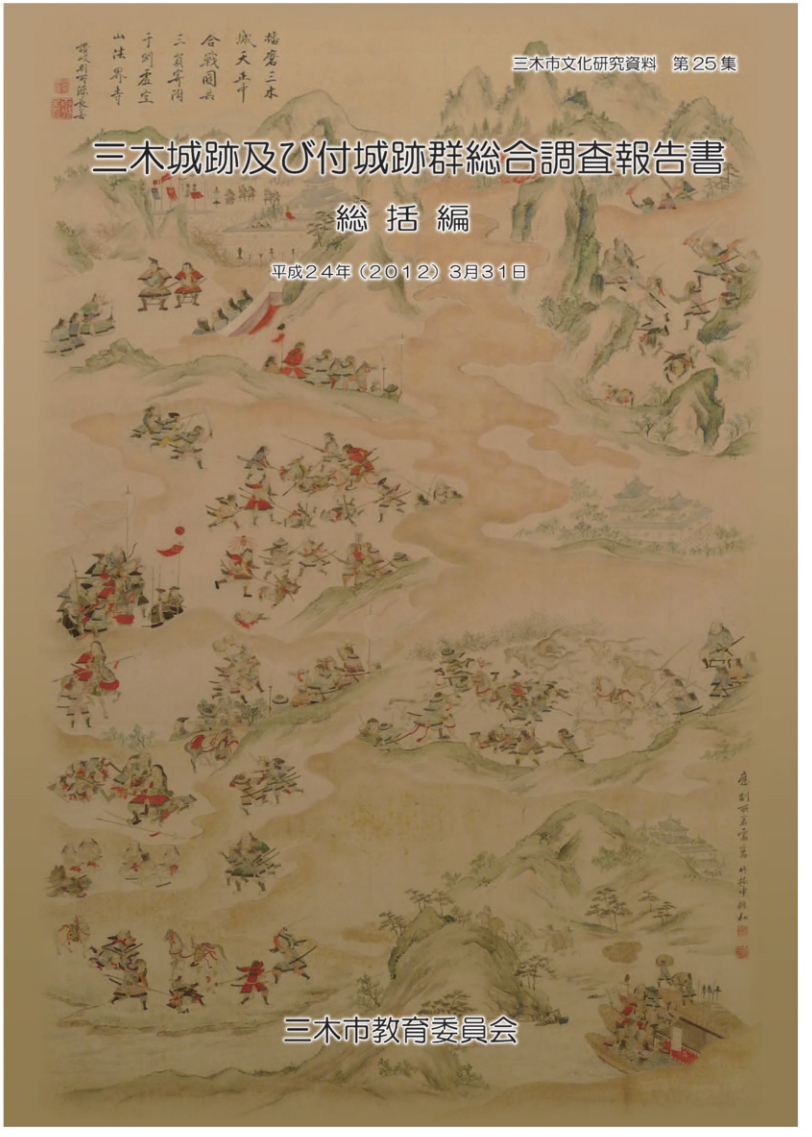
三木市文化研究資料　第25集

三木城跡及び付城跡群総合調査報告書

総　括　編

平成24年（2012）3月31日



三木市教育委員会

例　言

1　本報告書は、平成21年度に刊行した、兵庫県三木市に所在する三木城跡、付城跡群及び多重土塁の学術調査に基づく総合調査報告書の総括編である。

2　調査に当たっては、文化庁文化財部記念物課、兵庫県教育委員会文化財室、三木城跡及び付城跡群学術調査検討委員会にご指導、ご助言を得た。

3　執筆、編集に当たっては、三木市教育委員会（文化スポーツ振興課学芸員　金松誠）が行った。

目次

報告書総括編

遺跡から見た三木城包囲網戦の実態と歴史的意義

1　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
2　文献史料から見た三木合戦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
3　付城跡群から見た三木合戦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
4　多重土塁から見た三木合戦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11
5　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　16

図版

写真図版

播磨周辺関係図

遺跡から見た三木城包囲網戦の実態と歴史的意義

1　はじめに

三木合戦とは、天正6年（1578）3月から天正8年1月17日までの1年10ヶ月にわたる羽柴秀吉を主将とする織田信長方と三木城主別所長治方との合戦をいう。その合戦の舞台となった三木城跡とそれを攻略するために築かれた織田方の付城跡群・多重土塁については、開発の波にさらされながらもその多くが現存している。

これらの遺跡は江戸時代において、すでに注目されており、広島浅野家7代重晟が明和3年（1766）に調製させ、原図は天和3年(1693)に成立したと考えられる江戸時代前期の軍学の古城絵図集『浅野文庫蔵諸国古城之図』（広島市立中央図書館蔵）（矢守 1981）には「三木」・「平井山」、すなわち三木城跡及び秀吉の本陣であった平井山ノ上付城跡の絵図が収載されている。

17世紀後半に記された『別所軍記』（法界寺蔵）（松林・山上 1996）、平野庸脩により宝暦12年（1762）に完成した播磨国の地誌『播磨鑑』（平野 1975）には付城一覧が城主名とともに記載されている。その他、『別所長治・羽柴秀吉対陣図』（本要寺蔵）、『羽柴秀吉軍三木城包囲図』（雲龍寺蔵）などの絵図類が残されている。天保12年（1841）に描き直されたとされる『播州三木城地図』には、付城跡とともに多重土塁線が描かれている。

しかし、近代に入ると、これら付城跡群・多重土塁の存在は次第に忘れ去られ、研究対象とされることはなかった。そのような状況が長らく続いたものの、1980年代に入り、城郭研究が進展していく流れのなかで再度注目を浴びることとなった。その先鞭をつけたのが、宮田逸民氏である。

三木市に在住する宮田氏は昭和56年、『日本城郭大系』12において、「三木城周囲に多数の付城を置いた。数か所の位置が確認できる」とし、その存在に着目した（宮田 1981）。翌年、宮田氏は『浅野文庫蔵諸国古城之図』と現地調査の成果を基に、平井山ノ上付城跡の本来の位置を確認した（宮田 1982）。また、同年には兵庫県教育委員会による中世城館調査の成果が報告書として刊行され、そのなかで、「二位谷の奥の塁」以下計31城の付城が記載されている（兵庫県教育委員会 1982）。しかし、いずれも項目の列挙のみで、図面が載せられておらず、詳細な調査はなされなかった。

その後、宮田氏を中心として地道なフィールドワークによる調査研究が進められ、平成3年、宮田氏は付城群と多重土塁の総括的研究を発表した（宮田 1991）。これにより、付城跡と多重土塁が数多く残っていることが明らかとなり、その存在が城郭研究者のみならず、歴史学・考古学界に広く注目されるようになった。宮田氏の一連の研究を受けて、三木市教育委員会は平成9～12年度に市内遺跡詳細分布調査を実施し、これまで未発見であった付城跡及び多重土塁を確認した（三木市教育委員会 2001）。これにより、付城跡と多重土塁の全容がほぼ把握されるに至ったのである。

こうした調査研究状況を踏まえ、三木市はこれら三木合戦関連遺跡の保存に向けて取り組むこととなった。平成18年度に三木市教育委員会が設置した三木城跡及び付城跡群学術調査検討委員会によって、文献史学・考古学・歴史地理学的手法により、多角的な調査研究が進められた。その成果は、平成22年3月『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』（以下、『報告書』とする）として刊行し、その価値付けを行ったところである（三木城跡及び付城跡群学術調査検討委員会 2010）。

『報告書』では各委員による多岐にわたる論考が発表され、今後のさらなる研究の進展が期待されるところである。その一方、三木市教育委員会としての総括が行われなかった点が、今後の課題として残された。

そこで、本稿では『報告書』のうち、特に三木城包囲網戦の総括を行うことを目的とする。そのために、以下

の作業を行う。①付城跡群をグルーピングする。②文献史料から分かること、遺跡から分かることを明確にする。③多重土塁の復元案を示す。以上の作業を通して、主に遺跡から三木城包囲網戦の実態について迫りたい。

なお、個別の付城・多重土塁の構造・発掘調査成果の詳細については、『報告書』（宮田 2010 a・2010 b、金松・廣井 2010）に委ね、その後の調査により新たな知見を得たものについては、その都度触れていくこととする。

なお、付城とは、一般的には攻略目標とする城郭を包囲するように築かれた臨時的な城のことを指す（高田 2007）。よって、本稿では便宜上、三木城包囲網戦における織田方の城を「付城」と呼び、付城も含めた特定の合戦に備えた臨時的な城のことを「陣城」と呼ぶこととする。

2　文献史料から見た三木合戦

天正5年（1577）10月、織田信長は部将羽柴秀吉に中国地方の毛利攻めを命じた。この時、別所長治は織田方について羽柴秀吉に協力することを約束する。

しかし、同6年3月初め、長治は、秀吉と対立し、毛利輝元方へ寝返った。思わぬ長治の離反に秀吉は、長治の叔父別所重棟（しげむね）をして何度となく説得を試みるが、長治は応じなかった。これにより、秀吉は三木城へ押し寄せ、近隣に火を放った[1]。信長も長治の離反を言語道断とし、これを成敗するよう命じた[2]。

4月1日、別所方は秀吉に一味した細川荘の領主冷泉為純（れいせいためずみ）を攻め、為純・為勝父子を討ち取った[3]。これに対し、秀吉は東播磨の反織田方の攻略を進めていき、4月12日、別所方の野口城（加古川市）を落城させている[4]。

その頃、別所氏を支援するため毛利方が播磨に入り、織田方の西播磨の拠点上月城（こうづき）（佐用町）を取り囲んでいた。秀吉は上月城の救援に向かい、高倉山に陣を敷いたが、毛利方の勢力に圧倒されたことから、6月16日、上京し信長に救援を求めた。しかし、信長からの返事は、上月救援をあきらめて、三木城を支援する神吉（かんき）城（加古川市）、志方（しかた）城（加古川市）両城の攻撃を優先し、その後三木城を取り囲むべしというものであった[5]。そこで、秀吉はやむなく上月城の救援をあきらめ、6月26日、書写山（姫路市）に入った[6]。

信長の命令を受け、織田信忠を主将とする織田方が神吉城を包囲したのは、6月下旬のことであった。武力で圧倒する織田方は、力攻めで一気に神吉城を攻め落とそうとするが、神吉城もよく防戦する。しかし、神吉城にとっては、頼みとする別所氏や毛利氏の救援がないことから、やがて織田方の城内乱入を許すこととなり、7月16日、城主神吉民部少輔が討ち取られ落城した。また、神吉城の落城を見て、志方城も人質を出して降服した[7]。

神吉・志方の城を落とした織田信忠以下の軍勢は三木に向かい、7月下旬には信忠は三木に在陣している。このころから付城の構築が開始されたと思われる。『信長公記』には「右両城羽柴筑前請取り、又これより、別所小三郎堅固籠候三木の城へ惣御人数取懸け、塞々に近々と付城の御要害仰付けられ御在陣候なり」とある[8]。すでに、秀吉は但馬にいた7月16日、近日、三木表に取出を構え、軍勢を置く予定であると書状に書いている[9]。付城構築は、神吉・志方を破ったのち、三木城を攻撃するという信長の方針に沿った作戦の展開であった。実際に付城構築を主導したのは信忠とみられ、『豊鑑』には「信忠も實さぞな日をうつさず三木へこそはよせめとて、軍のなにがしどもにふれ給ふて、八月末つかた大勢を三木の城へつかはし、廻りをかこみ、向城餘多所、秀吉の居給はん所は乍山とて乾にあたれるにや、かたくかまへをなし置秀吉に渡し」とある[10]。信忠は付城を数多く構築し、平井山を秀吉の本陣として引き渡していたようである。信忠は実際には8月17日に帰国していることから[11]、7月末から帰国までの間に、これら付城を構築したものといえよう。

同年10月、織田方であった荒木村重が離反し、毛利方に与して居城の有岡城に籠った。こうした情勢を受けてか、10月22日、別所方は三木城から平井山本陣への襲撃を試みる。しかし、長治の弟治定が討死するなど別所方の敗北となった[12]。

天正７年２月、長治は赤松則房を通じて、信長に講和を願った。しかし、信長はこれを拒絶している[13]。

４月になると、信長から播磨に軍勢が再び派遣された。８日に織田信澄・堀秀政・越前衆、10 日に丹羽長秀・筒井順慶・山城衆、12 日に織田信忠・北畠信雄・織田信包・織田信孝が出陣し、猪子兵介・飯尾隠岐両人が「取出御普請の御検使」として派遣されている[14]。26 日には「中将信忠卿、播州三木表に、今度六ヶ所塞々に御取出仰付けられ」とあり[15]、信忠が付城を新たに６ヶ所築くなどして三木城の包囲をさらに厳重なものとした。

５月 25 日、秀吉方は花隈（はなくま）からの兵糧ルートであった丹生山（たんじょうさん）の海蔵寺取出を夜中に急襲して落とし、翌日、丹生山の北麓の淡河（おうご）城を攻め、城主淡河弾正以下を撤退に追い込んだ[16]。これにより、三木城は東側からの兵糧の補給ルートが閉ざされることとなった。

６月以降に本格化するとみられる毛利方による明石浦から三木城への兵糧搬入に対し、秀吉方は、『播州御征伐之事』によると、「依之為塞三木・魚住通路、始君峯廻之付城五六十、其透々立番屋、堀、柵、乱杭、逆茂木、表引荊棘、裡浚堀、寔走獣飛鳥難逃、況於人間乎、此時、聞三木城内之糧盡」とあり[17]、三木・魚住の通路を塞ぐために、君ヶ峰城を始めとする周辺の付城の間に番屋・堀・柵などの防御施設を設置したことにより、三木城の食糧不足は深刻なものとなっていった。このような中、６月 22 日、秀吉の軍師であった竹中半兵衛が陣中で病死している[18]。

９月 10 日、三木城への兵糧搬入を遂げたい毛利方は、防備が手薄な平田・大村付近を襲い、同時に別所方が三木城内から出撃して兵糧を三木城内に運び込もうとした。これにより、秀吉方は谷大膳が討死したが、別所方も兵糧搬入部隊が秀吉方の攻勢を受け、別所甚太夫、三太夫、淡河弾正など多くの武将が討ち取られた[19]。

10 月７日、平田大村合戦に勝利した秀吉方は、南は八幡山、西は平田、北は長屋、東は大塚に付城を築き、さらに三木城包囲網を狭めた。『播州御征伐之事』によると、城の５～６町付近では、陸に高さ１丈余りの築地を築いて、石を入れ込んだ二重の塀を設け、重ねがさねに柵を設置した。川面には駕籠（かご）を伏せて梁杭を打ち込み、橋上に見張りを置いて監視した。辻々には城戸を設けて秀吉の近習を交代に番におき、付城守将の通行手形のない者を一切通さなかった。夜でも篝火を焚いて白昼のごとくであったという。三木城内に蓄えた食糧は尽き、餓死者が数千人出た。初めは糠（ぬか）・秣（まぐさ）を、中頃には牛馬・鶏・犬を食し、ついには人を刺し殺してその肉を食べたという[20]。これらのことから、10 月７日以降毛利方からの組織的な兵糧搬入は行われなくなった可能性が高い。

10 月下旬、長治は小寺休夢斎を介して、秀吉に降参を願う。秀吉は御着の小寺政職と志方の櫛橋政伊がともに開城するのであれば、「いのちをたすけ候か、又ほしころし候か、両度にいちとうきわめ可申候」とし、降参を認める可能性について言及した[21]。結局のところ、長治の願いは叶わず、まさに秀吉自身が表現した「干し殺し」という状態をもたらすことになったといえよう。

年が改まって天正８年を迎えると、秀吉はいよいよ本格的に三木城攻略に取り掛かることとなった。６日には秀吉は調略により、宮ノ上要害を乗っ取り、11 日には鷺山構を乗り崩し、長治の弟友之が守る鷹尾山城と叔父賀相（よしすけ）の籠る新城を攻略した[22]。15 日になり、別所重棟が城内から小森与三左衛門を呼び出し、別所長治・賀相・友之の切腹を促し、長治は城兵の助命を条件に秀吉の降伏勧告を受諾した。そして、17 日に長治ら一族が自害することで三木城が開城となり[23]、三木合戦は終結した[24]。

３　付城跡群から見た三木合戦

（１）概要

三木合戦の際、織田方は三木城攻略のために平井山に本陣を置き、周囲に数多くの付城を築いた。付城は三木城の周囲を東西約６km、南北約５km の範囲に展開する。付城群については、近世に作成された『播磨鑑』（宝暦

12年〈1762〉)、『別所軍記』(17世紀後半)、『播州三木城地図』(天保12年〈1841〉)などには織田方の付城が数多く記されている。『播磨鑑』は「三木城寄衆次第」として付城一覧を記載しており(史料1)、『別所軍記』(史料2)もほぼ同様の記事を載せる。これらの史料から、付城群の総数については、推定も含めて40城余りが存在していたとみられる。三木市が遺跡として把握しているものは27城ある(図版1)。そのうち、明確な付城遺構が確認できたものは23城、現存しているものは20城を数える。

『報告書』では史料のみで確認されている付城や史料にもなく推定等による付城についても取り上げたが、総括編では、明確な付城跡として把握している23城のみを対象として検討する[35]。

(2)構造

①付城の類型化

陣城プランの特徴は基本的に本郭部と駐屯部の二重構造で成り立っていることが従来指摘されている(多田1989)。よって、この基本プランのあり方から、以下のとおりに類型化する。

A　土塁・溝で区画された空間と周囲の尾根上に軍勢の駐屯部を配するタイプ(図版2)
羽場山上付城跡、二位谷奥付城跡C

B　本郭部は土塁囲みの小規模な方形単郭の主郭のみで構成され、周囲の尾根上に軍勢の駐屯部を配するタイプ(図版3・4)
平井村中村間ノ山付城跡、跡部村山ノ下付城跡、加佐山城跡、二位谷奥付城跡B

C　本郭部は大規模な主郭のみで構成され、谷に雛壇状曲輪群を配するタイプ(図版5・6)
久留美村大家内谷上付城跡、和田村四谷村ノ口付城跡

D　主郭を中心として、周囲の尾根上に曲輪群を配するタイプ(図版7)
平田村山ノ上付城跡

E　土塁囲みの主郭以外に核となる曲輪があり、谷に雛壇状曲輪群を配するタイプ(図版8・9)
平井山ノ上付城跡、慈眼寺山城跡

F　土塁囲みの主郭以外に核となる曲輪があり、周囲の尾根上に軍勢の駐屯部を配するタイプ(図版10)
八幡谷ノ上明石道付城跡A・B・C

G　土塁囲みの主郭と副郭の序列が明確で、谷に雛壇状曲輪群を配するタイプ(図版11・12)
道田村法界寺山ノ上付城跡、碧ヶ峰城跡

H　折れを伴う曲輪の周囲に堀を設け、周囲の尾根上に軍勢の駐屯部を配するタイプ(図版13・14)
高木大塚城跡、高木大山付城跡

I　土塁囲みの主郭に馬出・外枡形状の複雑な虎口が設けられ、周囲の尾根上に軍勢の駐屯部を配するなど、主郭に対して求心的な構造を基本とするタイプ(図版15・16・17)
シクノ谷峯構付城跡、明石道峯構付城跡、小林八幡神社付城跡、三谷ノ上付城跡、二位谷奥付城跡A

基本的にはAは簡素な構造であり、Iに至るにしたがってより高度な構造となっていく。

②各類型の概要

Aタイプ

土塁・堀によって区画されている空間及び周囲に高低差が少ない尾根が広がり、軍勢の駐屯部として利用されたものと考えられる。城域面積[36]は1000㎡に満たず小規模である。

二位谷奥付城跡Cは、西辺に南北に延びる土塁ラインを配し、北辺に東西に延びる土塁ラインで城域を画す。平成23年度に確認調査を実施したところ、西辺土塁ラインの北端付近の櫓台状に広がる箇所については、当時

史料1　三木城寄衆次第

『播磨鑑』

三木城寄衆次第　　天正六年三月上旬

一平井山ノ上　大將羽柴筑前守秀吉公
一平井村・中村間ノ山　筑前守殿後見竹中半兵衛（重治）
一與呂木村上野　筑前守弟羽柴小市郎（長秀）　栗山源之亟
一細川荘中村・西村　荒木攝津守（村重）　荒木平太夫（重堅）
一久留美村山上　堀尾山城守（吉晴）
一同村慈眼寺山上一本松ノ所ニ　有馬法印（則頼）
一同村大家内谷上（皇垣内）　加藤作助（光泰）　横目衆
一同村川ノ上ニ　中村孫平次（一氏）　別所孫右衛門（重棟）　此人後ニハ鳥町村ノ前ニ出
一跡部村ノ上　仙石權兵衛（秀久）
一同村山ノ下　小田七兵衛（織田信澄）
一同村ト加佐村ノ間ニ　木下將監（昌利）
一加佐村ノ上　杉原七郎右衛門（家次）（左）
一同村　加藤勝八（嘉明）　横目衆
一平田村山ノ上　古田馬之助
一同村　吉田庄左衛門（重則）（古）（吉）
一大村山ノ上　吉野大膳（衛好）（谷野）
一同所　三田新兵衛
一同所　前野勝右衛門（長康）
一鳥町村川原　別所孫右衛門（重棟）
一這田村　法界寺山ノ上　宮部是定坊（善祥坊）（継潤）
一同所　出口五郎左衛門
一同所　石川清助　横目衆
一羽場山上　明石與四郎（則実）
一中島町八幡谷ノ上明石道　麻島彦太郎（間島）（氏勝）
一同所　福原馬之助（長堯）
一三谷ノ上（箕谷）　賀須谷内膳（武則、真雄）
一二位谷奥　淺野彌兵衛（長政）
一同所　一柳小兵衛　横目衆
一大塚町上君ヶ峰　木下與市郎
一宿原村ノ上　馬場治左衛門
一吉田村ノ上　竹内半兵衛
一和田村・四合谷村ノ口　近藤兵部　五十嵐九郎右衛門　横目衆
一同所　安藤勘兵衛
一高男寺村　岡部伊豫　同勝太夫　横目衆
一池野村　青木治部（一矩ヵ）
一同所　三吉志摩守
一安福田村ノ上　丹羽權兵衛　板倉勝助　此兩人ハ筑前守後見也
一同村川端　山岡文藏　等也

右城内竝寄手之圖別ニ有之

史料2　別所軍記　法界寺所蔵

松林靖明
山上登志美『別所記―研究と資料―』

爰ニ、羽柴筑前守秀吉、兼三木城ノ四方ヲ楯切、兵粮責ト計リケレバ、其身ハ平井山一城カマヘ、楯寵面々ニハ、大将羽柴筑前守秀吉、同舎弟小市郎秀長、栗山源之丞、其外諸将士卒五千余騎テ守之。又平井村・中村之間ニハ、秀吉之後見タル竹中半兵衛重治大将ニテ一千余騎、細川之庄中村三田新兵衛大将テ守之。細川庄西村ハ荒木摂津守大将シテ士卒数多之守。久留米村上ハ堀尾山城守、同村慈眼寺ノ上一本松ハ有馬法印、同久留美村川端ハ中村孫平治之守ル。同大家内谷上御横目衆加藤作助、跡部村ノ上ハ仙名権兵衛、同小田七兵衛、又跡部村ト加佐村トノ間ハ木下将監（是守）、口閉谷ハ（高木ト三木トノ）間木村隼人、大塚ハ脇坂甚内、加佐村上ニハ杉原七郎左衛門、同所御横目衆加藤正八、平田村ノ上ハ古田馬之助、吉田庄右衛門（古田吉左衛門）、大村ノ上ハ谷野大膳、荒木平太夫、大村前之川原ハ別所孫右衛門尉重棟、法界寺ノ上ハ因州城主宮部是定坊、法界寺山三町程南出口五郎左衛門、御横目衆石川清助、羽場之上明石道ハ明石与四郎、八幡谷ノ上明石道ハ麻島彦兵衛、福原右馬之助、箕谷ノ上ハ加須屋内膳、中尾二位谷奥浅野弥兵衛、二位谷ハ御横目衆一柳小兵衛、君峯木下与市郎、宿原上ハ馬場治左衛門（此所初ハ別所志摩守居城也）、吉田村上ハ織田孫九郎、安福田之上ハ丹羽権之尉、板倉正助ノ両人、同所川端ハ山岡文蔵、和田・四合谷口ハ近藤兵部、安藤勘助、御横目衆五十嵐九郎衛門、池野村ハ青木治平、三好志摩守、高男寺村ハ岡崎伊与守、御横目衆岡崎庄太輔、以上大将四十二人、寔家々ノ旗差物山風翻、勢トウ〳〵トシテ三木城ゾ取巻タリ。掛シカバ三木ノ町人或ハ十二ヶ村百姓、老若男女共三木城遁込。皆別所長治公ノ御憐愍ヲ蒙リ、兵粮ツイヘ多ク日々ニ糧乏ク、其上秀吉多クノ附城構ヘ、兵糧運送之道立切シカバ、城中次第々ニ兵糧乏ク、殊郡民多打詰居ル事成レバ、城中殊外及難義。

の土塁上に現代客土が積まれて形成されたものであることが判明した。北端部で土塁が東に折れる箇所についても、同様に現代の客土によるものであることが分かった。北辺土塁は両側に溝が設けられており、西端は土塁と溝が途切れていることから、この部分が虎口と考えられる。西辺土塁は間隔を空けて北へ向かっていることから、二位谷奥付城跡Bとの連携が想定される。

羽場山上付城跡は明石道を見下ろす立地であり、明石道を挟んだ山上に八幡谷ノ上明石道付城跡A・B・Cが立地していることから、一連のものと考えてよいであろう。

Bタイプ

方形単郭型の本郭部と周囲の緩斜面に広がる駐屯部からなる。主郭には複雑な虎口はみられない。堀による駐屯部の明確な区画については、平成4年度に本発掘調査が全面にわたって実施されたことによって検出された加佐山城跡（兵庫県埋文事務所1995）のみにみられる。その他の付城においても、今後の調査によって駐屯部を区画する遺構が検出される可能性がある。城域面積については、主郭部のみの跡部村山ノ下付城跡及び二位谷奥付城跡Bについては1000㎡に満たないが、明確な駐屯部を持つ加佐山城跡の面積は2,000㎡を超える。

二位谷奥付城跡Bでは本発掘調査が実施され、1間×3間の掘立柱建物跡が検出された（兵庫考古学研究会1998）。一方、加佐山城跡では建物跡が確認されていない。これについては、付城における礎石建物跡については、資材の持ち運びが簡易にできるプレハブ式の軽量礎石建物であった可能性が指摘されている（多田2001）。建物の解体に伴う礎石の持ち運びの可能性についても、今後視野に入れていく必要があろう。出土遺物がほとんどみられないことも、生活用品などの道具一式が持ち運びされていたことを示すものとも考えられよう。

Cタイプ

大規模な主郭が本郭部と駐屯部を兼ねつつ、谷に曲輪群を設けることにより、さらに駐屯部を確保している。主郭の三木城側に櫓台状遺構もしくは土塁に張り出し部を設け、対処している。城域面積は、久留美村大家内谷上付城跡は約19500㎡であり、付城群の中では平井山ノ上付城跡に次いで2番目の規模を誇る。和田村四合谷村ノ口付城跡は約11400㎡であり、比較的大規模である。

久留美村大家内谷上付城跡には堀切がみられないが、和田村四合谷村ノ口付城跡は東西に堀切を設けて城域を画し、特に三木城側に対し、連続して堀切・土塁を配し、厳重に防御されている。

平成15年度に本発掘調査が実施された和田村四合谷村ノ口付城跡は南北朝期の暦応2年（1339）、丹生山を拠点とする南朝方に対する赤松円心を主将とした北朝方の拠点の一つである「志染軍陣」の可能性が指摘されており（兵庫県立考古博物館2011）、織田方がこれを改修して利用されたものと考えられる。

Dタイプ

この類型は平田村山ノ上付城跡のみである。城域面積は約4600㎡であり、東から延びてきた尾根西端の頂部の櫓台状遺構（a）を基点として北・西・東尾根にそれぞれ曲輪群を配しており、切岸による防御を主体とする。

Eタイプ

土塁囲みの主郭以外にも核となる曲輪を配し、谷部に雛壇状曲輪群を設け、軍勢の駐屯部を確保している。駐屯部を確保することに力点を置いており、桝形や馬出などの複雑な虎口はみられない。背後の尾根続きに対して、城域を画する堀切は見られない。

このうち、平井山ノ上付城跡は羽柴秀吉が本陣とした付城跡である。美嚢川と志染川に挟まれた山上に位置する。南西に三木城を望むことができる。土塁囲みの主郭Ⅰを中心として、東西に尾根が延び、その尾根から派生する北側支尾根に曲輪群が設けられている。支尾根間の谷部に雛壇状の曲輪群を設け、軍勢の駐屯部が確保されている。曲輪Ⅱ・Ⅲが Ⅰと独立して曲輪群を形成している。Ⅰの東側尾根とⅢに挟まれる谷が大手とみられる。

城域面積は約38000㎡であり、付城群の中でも群を抜いて最大規模である。

慈眼寺山城跡は美嚢川右岸に面した尾根上に位置する。三木合戦の付城のなかで最高所にあり、三木城周辺のみならず、遠くは加古川・高砂沖まで一望できる。土塁囲みのⅠを主郭として、ピークのⅡ・Ⅳが独立して曲輪群を形成している。ⅠとⅡはⅢを介して連絡できるようになっている。Ⅰ北側のⅣ・Ⅴに挟まれた谷とⅠ東側の谷に雛壇状曲輪群を設け、軍勢の駐屯部としている。なお、主郭南側は平成4年度に実施された本発掘調査により、東西3間、南北4間以上の礎石建物跡が検出されている（兵庫県埋文事務所1995）。

Fタイプ

八幡谷ノ上明石道付城跡A・B・Cがあげられる。三木町より明石に向かう明石道の東側尾根上に位置している。一城別郭構造を呈し、全長は約550m、城域面積は約14000㎡に及び、付城群の中で4番目の規模である。

Aは平成10年度に実施した本発掘調査により、主郭が土塁のほかに空堀で囲まれていたことが確認され、さらに内部では柱穴群と1間×1間の掘立柱建物跡、主郭東脇の通路から門跡とみられる礎石が検出されたことから、中核を担っている地区といえる（三木市教育委員会1999）。一方、Bは土塁で囲まれた中核となる曲輪があり、最高1.5mの西辺土塁が南へ延び、Cの方向へ続いていく。平成22年度に実施した確認調査により、Bの土塁囲みの曲輪の西辺土塁は明褐色で固く突き固めて築かれていたことが判明した。Cについては、同じく平成22年度に実施した確認調査により、Bから続くなだらかな尾根の南西側において、両脇に溝を掘り、その土を簡単に積み上げて築かれた南北に延びる土塁ラインによって、駐屯部が画されていたことが明らかとなった。

以上、A・Bに設けられている土塁囲みの曲輪が中心部と考えられ、それを繋ぐA・B間の尾根及びB・C間の尾根、Cが駐屯部として利用されたものといえよう。

Gタイプ

道田村法界寺山ノ上付城跡、君ヶ峰城跡は、東に主郭、西に副郭を配し、谷部に雛壇状曲輪群を配するという点で類似した構造となっている。城域面積は、前者は約16700㎡であり、付城群の中で3番目の規模を誇り、後者はその約半分となる約8600㎡である。主郭については、前者は南側に馬出状の虎口空間を配し、後者は城外からcに進入するルート及びbからaに進入するルートが喰違状になっており、主郭南西隅が尾根道に張り出し、横矢掛かりを配している。前者は城域を囲い込むように谷部に空堀や土塁を配している。

なお、昭和63年度に本発掘調査が実施された君ヶ峰城跡からは、主郭北東部で14個の礎石が検出され、その検出状況から4間×4間の片庇付きの礎石建物が存在していたと考えられる（三木市教育委員会2000a）。

Hタイプ

折れを伴う曲輪の周囲に横堀がめぐり、周辺に比較的平坦な台地が広がる。城域面積は高木大塚城跡は約2500㎡、高木大山付城跡は約500㎡を測り、小規模である。高木大山付城跡は平成23年度に実施した確認調査によって、城内は北西側が昭和30年頃の土取りのため一段低くなり、東辺・南西辺の堀状の凹地についても土取りによって削られていることが明らかとなった。周囲には横堀（幅2.8～4.5m、深さ1.4～1.9m）が設けられていることが確認できた。そして、曲輪については、軟質の黄色系砂質土によって盛土されていたことが判明した。

高木大塚城跡は十字型に土塁とその外周に浅い横堀をめぐらし、虎口及び四周に横矢掛かりを設け、中央の高木1号墳を櫓台的に利用するなど、より質の高い構造を呈す。

Iタイプ

土塁囲みの主郭に、馬出・外枡形などの複雑な虎口が設けられ、周囲に軍勢の駐屯部を付属させるなど、主郭に対して求心的な構造を呈する。大半の事例で櫓台状遺構が付属し、より強固な縄張となっている。城域面積は約2000～5000㎡を測り、比較的小規模といえる。

シクノ谷峯構付城跡・明石道峯構付城跡・小林八幡神社付城跡は主郭（Ⅰ）、虎口曲輪（Ⅱ）・駐屯部（Ⅲ・Ⅳ）で構成されている。主郭は土塁がめぐり、櫓台状遺構が設けられている。

特に二位谷奥付城跡Aは平成９・10年度に全面にわたって本発掘調査が実施された結果、主郭（Ⅰ）と重ね馬出し（Ⅱ・Ⅲ）、溝状遺構・柱穴群・二位谷土塁Aで区画された駐屯部と考えられるⅣで構成されていたことが確認できた。主郭には４棟の掘立柱建物が規則的に配置され、主郭外の曲輪内からは建物跡が検出されなかったことから、各曲輪における機能分化が明らかになった。虎口においては、門跡とみられる礎石が検出された。さらに、主郭土塁外法面に斜め上に突き刺さっていたとみられる多数のピットが検出され、Ⅱ土塁状においても浅い溝状遺構が検出されたことから、土塁状に構築物が設けられていたことが判明するなど大きな成果があった（兵庫考古学研究会1998）。

なお、三谷ノ上付城跡は、後世の破壊により、その構造は明確には把握しきれないが、主郭（Ⅰ）と駐屯部（Ⅱ）のあり方が当類型の他の付城と共通していることから、主郭西側の尾根続きにも虎口空間的な施設が備わっていたものと想定したい。

（3）付城群の構成

付城群の構成を考えるにあたり、まず付城群の立地について検討する。

三木城を中心とした方角的な立地的特徴について、以下の４つに分類することができる。

Ⅰ　三木城から美嚢川・志染川を隔て北の山上に位置する付城群
　平井山ノ上付城跡、平井村中村間ノ山付城跡、慈眼寺山城跡、久留美村大家内谷上付城跡、跡部村山ノ下付城跡、加佐山城跡、平田村山ノ上付城跡

Ⅱ　三木城南側に位置する、多重土塁と連動している付城群
　這田村法界寺山ノ上付城跡、高木大塚城跡、高木大山付城跡、シクノ谷峯構付城跡、明石道峯構付城跡、小林八幡神社付城跡、

Ⅲ　三木城南側の多重土塁の内側にあり、三木城に対して比較的近接している付城群
　羽場山上付城跡、八幡谷ノ上明石道付城跡A・B・C、三谷ノ上付城跡、二位谷奥付城跡A、二位谷奥付城跡B、二位谷奥付城跡C、君ヶ峰城跡

Ⅳ　多重土塁より外側に位置する付城
　和田村四合谷村ノ口付城跡

Ⅰは三木城からの距離については、平井山ノ上付城跡が2.8㎞、平井村中村間ノ山付城跡が2.9㎞とやや遠い距離にあり、それに次いで慈眼寺山城跡は2.4㎞の距離に位置する。そして、久留美村大家内谷上付城跡・跡部村山ノ下付城跡・加佐山城跡がそれぞれ1.7・1.4・1.9㎞と比較的三木城の近くに位置する。Ⅱは三木城からの距離については、2.05～2.4㎞とほぼ近似した距離に位置する。Ⅲは三木城からの距離については、八幡谷ノ上明石道付城跡はAを基点とし、二位谷奥付城跡はAを基点とすると、1.3～1.55㎞の距離に位置する。Ⅳは三木城からの距離については、3.1㎞を測る。直接的な三木城包囲網の付城としては最も遠くに位置する。

次に、立地と類型を絡めてみると、以下の通りとなる。

Ⅰ－B　平井村中村間ノ山付城跡、跡部村山ノ下付城跡、加佐山城跡
　C　久留美村大家内谷上付城跡
　D　平田村山ノ上付城跡
　E　平井山ノ上付城跡、慈眼寺山城跡
Ⅱ－G　這田村法界寺山ノ上付城跡

H　高木大塚城跡、高木大山付城跡

I　シクノ谷峯構付城跡、明石道峯構付城跡、小林八幡神社付城跡

Ⅲ－A　羽場山上付城跡、二位谷奥付城跡C

B　二位谷奥付城跡B

F　八幡谷ノ上明石道付城跡A・B・C

G　君ヶ峰城跡

I　三谷ノ上付城跡、二位谷奥付城跡A

Ⅳ－C　和田村四合谷村ノ口付城跡

立地Ⅰの付城群は、山の地形に合わせて曲輪を上下に連ねる構造のものが多く、背後の尾根続きに対して、堀切などがほとんど見られず、遮断防御はあまり意識していない。特にCの久留美村大家内谷上付城跡、Dの平田村山ノ上付城跡、Eの平井山ノ上付城跡、慈眼寺山城跡でその傾向が顕著である。全体的に防岸防御主体の縄張といえる。馬出・外枡形などの複雑な虎口はみられない。

Eの平井山ノ上付城跡、慈眼寺山城跡については、三木城の反対側の谷部に雛壇状曲輪群を設け、軍勢の駐屯部を確保している。これは、三木城から付城内の軍勢の状況が見えないようにするためのものといえる。曲輪間の連絡については、特に平井山ノ上付城跡は通路が網の目ように連絡が取れるようになっている。兵の移動をスムーズにするためのものといえ、まさしく攻めるための城といえる。背後の尾根続きに対して、堀切などがほとんど見られないことは、各付城間の連絡をしやすくするためのものともいえる。一方、これらのことは防御が手薄になることをも意味している。三木城が美嚢川・志染川を隔てており、比較的安全な地域であったのであろう。

立地Ⅱの付城群は、三木城南側の最も外側に位置し、比較的平坦な尾根・台地上に立地している。道田村法界寺山ノ上付城跡を除き大規模な付城はみられないが、土塁囲みの主郭に、馬出・外枡形状などの複雑な虎口が設けられ、周囲に軍勢の駐屯部を付属させるなど、主郭に対して求心的な構造を呈するG・Iタイプ及びそれに準ずるHタイプで占められる。付城間を多重土塁で連結している。Iタイプには櫓台が附属し、より強固な縄張となっている。これらは、毛利方が明石魚住から三木城へ兵糧を搬入するのを防ぐための最前線であるため、より高度な築城技術が用いられたものと考えられる。ほとんどの付城において、虎口などの防御遺構が三木城方向ではなく、兵糧搬入方向に向いていることが、その重要性を物語っている。

表１　付城類型一覧

類型	付城名	遺跡番号	立地	標高(m)	比高(m)	面積(㎡)	三木城本丸からの距離(km)
A	羽場山上付城跡	24	Ⅲ	93	48	947	1.3
	二位谷奥付城跡C	31	Ⅲ	123	21	858	2.1
B	平井村中村岡ノ山付城跡	9	Ⅰ	130	51	2039	2.9
	跡部村山ノ下付城跡	13	Ⅰ	74	14	996	1.4
	加佐山城跡	14	Ⅰ	138	80	2078	1.9
	二位谷奥付城跡B	30	Ⅲ	122	22	328	2
C	久留美村大家内谷上付城跡	12	Ⅰ	78	26	19491	1.7
	和田村四合谷村ノ口付城跡	33	Ⅳ	96	37	11394	3.1
D	平田村山ノ上付城跡	15	Ⅰ	122	67	4593	1.9
E	平井山ノ上付城跡	8	Ⅰ	145	94	38465	2.8
	慈眼寺山城跡	11	Ⅰ	148	72	5789	2.4
F	八幡谷ノ上明石道付城跡A	25		94	35	13983	1.3
	八幡谷ノ上明石道付城跡B	26	Ⅲ	103	43		1.35
	八幡谷ノ上明石道付城跡C	27		108	48		1.5
G	道田村法界寺山ノ上付城跡	18	Ⅱ	78	43	16727	2.2
	君ヶ峰城跡	32	Ⅲ	137	56	8639	1.4
H	高木大塚城跡	19	Ⅱ	88	33	2543	2.1
	高木大山付城跡	20	Ⅱ	91	31	535	2.2
I	シクノ谷峯構付城跡	21	Ⅱ	98	28	2936	2.3
	明石道峯構付城跡	22	Ⅱ	106	32	4733	2.05
	小林八幡神社付城跡	23	Ⅱ	120	22	5078	2.4
	三谷ノ上付城跡	28	Ⅲ	113	31	2007	1.5
	二位谷奥付城跡A	29	Ⅲ	119	31	2571	1.55

なお、這田村法界寺山ノ上付城跡は、三木城を挟んで平井山ノ上付城と対角線上に結ぶことができる。立地Ⅱの付城群の中で最大規模を誇る当城が、平井山ノ上付城とともに三木城に睨みを利かしていたといえよう。

立地Ⅲの付城群は、三木城の南側の最前線に立地する。多重土塁では結ばれていない。確実なⅠタイプは、二位谷奥付城跡Aだけであるが、重ね馬出を設けるなど、最も洗練されている。東端にGタイプの君ヶ峰城跡が配されて、尾根道を抑えている。Fタイプの八幡谷ノ上明石道付城跡A・B・Cは明石道を抑える一体の付城と考えられる。全山を城郭化しており、大規模化している。三木城側に当たるAにより発達した縄張を設け、南端のCは駐屯部となっている。Aタイプの羽場山上付城跡も明石道を見下ろす立地であることから、単独ではなく八幡谷ノ上明石道付城跡A・B・Cとの一連のものと考えられる。このように考えると、二位谷奥付城跡A・B・Cについても、同一尾根上に全長約580mにわたって立地するという点において、一城別郭構造として評価した方が適切ともいえる。八幡谷ノ上明石道付城跡A・B・C同様、三木城側に当たるAにより発達した縄張りを設け、南端のCは駐屯部となっている。Ⅲの付城群は、八幡山・二位谷奥の尾根全体を城郭化した大軍勢が駐屯可能な付城を中心とし、主要街道を押さえるという、力攻めを意識したまさに最前線の付城群と評価できる[27]。

Ⅳの付城は、Cタイプの和田村四合谷村ノ口付城跡のみ該当する。志染川を扼する立地であることから、河川ルートを抑えるとともに、東側からの兵糧搬入を阻止する目的で築かれたものといえる。大人数の軍勢が駐屯できたものと考えられる。

（4）築城時期

これらの付城群の築城時期について検討する。築城時期は文献史料により大まかに3期に分けられる。まず、第1期は天正6年（1578）7月末から8月中旬、織田信忠以下の大軍が平井山以下の付城を築いた。第2期は翌7年4月、信忠以下が再度播磨に入り付城6ヶ所などを築いた。第3期は同年10月7日、平田大村合戦に勝利した秀吉が、南は八幡山、西は平田、北は長屋、東は大塚に付城を築き、三木城包囲網を狭めた。

第1期については、平井山ノ上付城跡の築城は確実である。その一連で考えると、Ⅰの三木城から美嚢川・志染川を隔て北の山上に位置する付城群が主に該当すると考えられる。平井山ノ上付城跡・久留美村大家内谷上付城跡・跡部村山ノ下付城跡は河川交通を扼する立地であるといえる。Ⅳの和田村四合谷村ノ口付城跡についても、多重土塁の外側に築かれており、それよりも以前の構築と考えられることから、第1期の築城とみてよかろう。志染川を扼する要衝に立地している点で先述の3城と共通していることからも、その可能性が高いといえる。

第2期については、信忠以下が付城6ヶ所を一時期に築いたことから、この6城は立地・構造において、規則的なものである可能性が高い。また、『豊鑑』には「（天正七年）三月初つかた、三木の向城程遠ければ近くよせんとて、城之介信忠兵餘多引具し播磨に下り、向城どもよせ給ふに、大勢なれば城中よりも出あふべき様もなくて、堀ほりへいぬりて、秀吉のずさども入置」とあることから、付城をより近い位置に築いたといえる。これらのことを考え合わせると、G・H・Ⅰタイプで占められる三木城南側の最も外側に築かれたⅡの立地の6城が、これに該当する可能性が高い。ただし、這田村法界寺山ノ上付城跡と高木大塚城跡の間に「納戸口」という付城があったことが『播州三木城地図』によって知られ、さらにすでに消滅している付城の存在も否定できない。よって、これらの付城のうちのいずれか、もしくは実際には6城以上築かれた可能性も考慮に入れるべきであろう。

第3期は三木城包囲網をさらに狭めていることから、最前線に築かれたⅢの立地の付城群がそれに該当すると考えられる。八幡谷ノ上明石道付城跡A・B・Cは史料に現れる「八幡山」に該当する可能性が極めて高い。なお、君ヶ峰城跡については、『播州御征伐之事』の「君峯」を始めとする周辺の付城の間に番屋・堀・柵などの防御施設を設置したという記述は天正7年6月頃のことと考えられることから、この記述を信頼すれば当城が第2期の段階ですでに築かれていたことになるが、立地的には第3期の可能性が高いと考えておきたい。

4　多重土塁から見た三木合戦

（1）概要

多重土塁は織田方によって築かれたもので、立地Ⅱの三木城南側の付城群をつないで、南側封鎖線が構築されている。これは商人による物資搬送、近隣諸勢力や毛利方などから運ばれる兵糧などを止めて「三木の干し殺し」に決定的な役割を果たしたと考えられる。享保元年（1716）『播州三木郡前田町絵図』（三木郷土史の会 2002）（写真図版1）には「大土」として描かれ、天保12年（1841）『播州三木城地図』（三木城復興の会 1993）（写真図版1）にも多重土塁線が描かれている。

三木市で遺跡として把握しているものは、朝日ヶ丘土塁・福井土塁群など、32遺跡である。そのうち、25遺跡が現存している。多重土塁は西端の朝日ヶ丘土塁[35]から東端の宿原土塁[65]まで、三木城南側を取り囲むように、総延長約5.5㎞にわたり構築されている。南の台地上から三木城側（北）に下る山道の傍に付城を配置して城に接続する土塁線を内側土塁線とし、それに平行した外側（南）にも土塁を築き、外側土塁線を設けている。基本的に土塁線間が付城間を連絡する通路として利用されていたと考えられる。なお、南側から三木城へ向かう主要道としては、A道、B道、C道、D道、E道、F道、G道があげられる。

構築時期については、多重土塁は法界寺山ノ上付城～小林八幡神社付城をつないでいることから、これら付城群と一体として捉えるべきであろう。これらの付城群が築造されたのは先述のとおり天正7年（1579）4月の可能性が高いことから、多重土塁はこれら付城群と同時に構築された可能性がまず考えられる。

しかし、『信長公記』の付城6ヶ所の築城の記事には、それをつなぐ「鹿垣」、「築地」などの構築については記述されていない。一方、同年6月頃の毛利方による明石魚住から三木城への兵糧搬入に対し、『播州御征伐之事』には、羽柴方が君ヶ峠城を始めとする周辺の付城の間に番屋・堀・柵などの防御施設を設置したと記述されている。これが多重土塁のことを指すとみられる。この記述を信頼すれば、同年4月に築かれた6ヶ所の付城と同時に多重土塁が構築されたのではなく、その2ヶ月後に6城を含めた三木城南側の毛利方と対峙する最前線の付城を結ぶように構築された可能性も考慮に入れるべきであろう。

なお、『播州御征伐之事』には、同年10月7日、南は八幡山、西は平田、北は長屋、東は大塚に付城を築き、築地以下を巡らして厳重に囲み三木城包囲網を狭めたと記述されている。しかし、該当するような遺構は縮小された付城付近には存在していない。この記述については、誇張された表現が含まれていると考えてよかろう。

土塁の構造については、基底部幅5m未満、現存高1mに満たないものが大半である。発掘調査の成果からは、基本的に両側もしくは片側に溝を掘り、その土を盛って簡単な整形を行った上で築かれている事例が多いことが明らかとなった。短期間に長大な土塁ラインを設けることを優先したために、土塁自体の強度まではそれほど追求していなかったことを示しているといえよう。発掘調査では土塁上面からは確実に柵列になりうる柱穴は検出されなかった。これは後世の削平や流出などのために、その痕跡が確認できなかった可能性もある。

（2）多重土塁線の推定復元

多重土塁の考察を行うにあたり、まず現況では確認できない多重土塁線の推定復元を試みる。多重土塁線の復元については、主に空中写真や聞き取り調査を用いて復元した『報告書』の宮田論文（宮田 2010b）によって、その全容はほぼ明らかとなっている[20]。よって、その成果を基礎とした上でさらに復元の精度を高めるため、明治期の地籍図による歴史地理学的手法を用いた復元を行う。復元の具体的作業方法は三木市税務課蔵の明治期の地籍図及び神戸地方法務局明石支局蔵の明治期の地籍図を併用し、その地割を昭和44年三木市都市計画図（2500分の1）をベースに用いて地籍図のひずみを修正し、地割の形状及び地目の種類等を総合的に判断した上で、多重土塁を示す地割を推測していく。地籍図の後世の加筆箇所については、できる限り取り除いた。

表２　多重土塁規模一覧

番号	遺　跡　名	全長（m）	基底部幅（m）	高さ（m）	発掘調査の有無	調査後の措置
35	朝日ヶ丘土塁	①157	3.6～5.0	0.2～0.6	無	
		②129	1.8～3.3	0.2～0.6	無	
		③196	2.3～5.0	0.4～0.7	無	
		④95	2.2～4.0	0.3～1.1	無	
		⑤239	2.0～5.0	0.4～0.5	有	盛土で保護
		⑥126	3.0～5.0	0.2～0.7	有	盛土で保護
36	高木大塚土塁	①235	3.0～5.4	0.6～1.4	有	工事実施・部分消滅
		②27	2.8～3.5	0.5～0.9	有	工事実施・消滅
		③43	2.0～4.0	0.8	無	
		④51	4.0	0.5	有	工事実施・部分消滅
37	高木大山土塁Ａ	23	1.8～4.0	0.2～0.7	有	現状保存
38	高木大山土塁Ｂ	117	3.3～4.0	0.3～0.9	有	工事実施・消滅
39	高木大山土塁Ｃ	28	4.0	0.5～0.6	有	工事実施・部分消滅
40	高木大山土塁Ｄ	70	4.0～5.0	0.5～0.7	有	工事実施・部分消滅
41	高木大山土塁Ｅ	130	—	—	無	
42	高木大山土塁Ｆ	50	—	—	無	
43	高木大山土塁Ｇ	25	—	—	無	
44	小林土塁Ａ	13	—	—	無	
45	小林土塁Ｂ	110	—	—	無	
46	小林土塁Ｃ	115	—	—	無	
47	小林土塁Ｄ	150	—	1.0	無	
48	小林土塁Ｅ	320（推定）	—	—	無	
49	福井土塁Ａ	98	2.6～6.0	0.4～1.1	無	
50	福井土塁Ｂ	35	3.0～4.4	0.8～1.1	無	
51	福井土塁Ｃ	60	3.2～4.2	0.1～0.2	無	
52	福井土塁Ｄ	①5	2.0	0.6	無	
		②8	2.4	0.4～0.5	無	
53	福井土塁Ｅ	260	1.9～2.85	0.3～0.5	有	工事未着工
54	福井土塁Ｆ	13	—	—	無	
55	福井土塁Ｇ	93	3.0～7.0	0.2～0.6	有	現状保存
56	福井土塁Ｈ	80	—	—	無	
57	福井土塁Ｉ	①150	1.8～3.0	0.6	無	
		②23	3.2～4.4	0.3～0.6	無	
58	福井土塁Ｊ	78	3.0～5.0	0.1～0.8	無	
59	福井土塁Ｋ	20	4.2	0.9	無	
60	福井土塁Ｌ	68	2.6～4.2	0.4～1.2	無	
61	福井土塁Ｍ	110	—	0.3	無	
62	福井城山土塁	18	2.5～3.4	0.3～0.55	有	工事実施・消滅
63	二位谷土塁Ａ	30	3.0	1.0	有	工事実施・消滅
64	二位谷土塁Ｂ	60	4.0	0.5～1.0	有	工事実施・消滅
65	宿原土塁	86	6.0	0.3～1.0	有	工事実施・部分消滅
66	宿ノ谷土塁	126	3.2～3.5	0.65～1.05	有	工事実施・部分消滅

なお、多重土塁と道との関係を明らかにするため、有馬道・姫路道以南の旧道について、先述の地籍図、同じく明治期の地籍図で地元に保管されていた「兵庫縣管下播磨國美嚢郡印内町地図」・「明治十五年兵庫県管下播磨國美嚢郡福井町地図」（筒井・山本2002）、明治19年大日本帝國参謀本部陸軍部測量部作成の2万分の1地形図などを参考として、先述の三木市都市計画図上に復元を試みた。

まず、明治期の地籍図を用いて旧地割を復元したのが図版22、これらを基にした多重土塁及び旧道復元案が図版23である。それでは、復元箇所ごとにその詳細を述べていく。

a地点

現状は朝日ヶ丘団地となっており、遺構は残らない。しかし、『播州三木城地図』（写真図版1）は法界寺山ノ上付城[18]の南東に「納戸口」と記す付城が描かれており、多重土塁が両付城間をつないでいる。さらに、「納戸口」と高木大塚城[19]が多重土塁で連結していたことが分かる。開発前の昭和36年及び38年国土地理院撮影の空中写真（写真図版5・6）には、田畑・道路を斜行し、北西から南東に延びる多重の細いラインがみえる。このラインは朝日ヶ丘土塁［35］東端と接続する可能性が高く、多重土塁とみてよい。外側土塁線側に土塁線と軸を同じくする古墳とみられる隅丸方形の高まりがあり、その東・北側を囲い込む多重の土塁ラインが外側土塁線を形成している。隅丸方形区画南東端から延びるL字状のラインが外側土塁線に接続する。これについては、高木1号墳を利用した高木大塚城と同様、付城遺構の可能性が指摘できることから、「納戸口」の可能性が高いといえる。多重土塁線は高木大塚城・高木大塚土塁［36］とつながっていくとみられる。

b地点

現状はホースランドパークのトラックとなっているが、その前は神戸営林署三木苗畑であった。昭和22年米軍撮影の空中写真及び昭和36年国土地理院撮影の空中写真（写真図版3・5）には、高木大塚土塁[36]と高木大山土塁A[37]・高木大山土塁D［40］をつなぐ二重の低い高まりがみられる。内側ラインは高木13号墳の北側を囲い込むかたちで屈曲し、南東へ延びてまもなく南西に折れる。そして、道に沿って南東へ折れ、その先端でL字状に折れ、高木大山土塁Aに接続する。なお、多重土塁間に道を取り込んでいる。

c地点

現状は田・宅地等である。昭和22年米軍撮影の空中写真及び昭和36年国土地理院撮影の空中写真（写真図版3・5）によると、高木大山土塁C[39]及び高木大山土塁D[40]南側延長線上が田の畔になっており、これらが多重土塁であった可能性が考えられる。内側土塁線は途中で南南西に斜路を変え、三叉路付近で東へ折れて台地縁に延び、その後南東に向きを変えて延びていくとみられる。宮田氏の聞き取りにおいても、そのことが確認されている（宮田2010b）。

d地点

現状は西側が牧場敷地、東側が畦道である。昭和22年米軍撮影の空中写真（写真図版3）によると、高木大山土塁G[43]とつながって南に延び、円状の高まりと接続した後、東南東へ折れる。その続きは田の畦道となり途中で南へわずかに一折れして小林土塁A[44]に接続する状況が見て取れる。なお、小林土塁B［45］の屈曲部内側に円状の高まりがみられる。

e地点

現状は西側が畦道であり、南東側は東西に延びる道路が新設されている。昭和38年国土地理院撮影の空中写真（写真図版7）によると、小林土塁B[45]と小林土塁C[46]をつなぐ畔が多重土塁の痕跡とみられる。地籍図によると、三木山官林と別所村小林字姥ヶ懐の境界線となっていることが分かる。

f地点

シクノ谷峯構付城［21］の谷を挟んだ南側の台地北縁に位置する。現状は田・山林であり、東端は南北に延びる道路が新設されている。昭和 38 年国土地理院撮影の空中写真（写真図版７）によると、弓なりの畝のラインが確認できる。昭和 50 年国土地理院撮影の空中写真（写真図版２）にもその様相が比較的明瞭に見て取れる[28]。

g 地点

現状は三木クリーンセンターや会社等の敷地となっている。昭和 22 年米軍撮影の空中写真（写真図版４）によると、細い谷を取り囲むように細長い畝のラインが見て取れることから、多重土塁の痕跡であると考えられる。地籍図によると、西端の南北方向の谷の東側台地縁の南北ラインは田畑に囲まれて山の標記がなされており、北辺が三木山官林と別所村小林字口ハメ谷の境界線となっている。

h 地点

現状は西端が三木グリーンパークとなり、それ以東は山林とほとんどが会社敷地となっている。昭和 22 年米軍撮影の空中写真（写真図版４）によると、福井土塁G［55］・H［56］・Ｉ［57］とつながる細長い畝のラインが多重土塁線とみられる。宮田氏の聞き取りにおいてもこのことが確認できている（宮田 2010ｂ）。昭和 60 年国土地理院撮影の空中写真（写真図版２）によると、西端は二重となり、福井土塁C［51］と連動して尾根を囲い込む。南辺は福井土塁D［52］と接続するとみられる。地籍図によると、三木山官林と別所村小林字口ハメ谷・仕負谷の境界線となっていることが分かる。

i 地点

現状は工場敷地となっている。昭和 22 年米軍撮影の空中写真（写真図版４）によると、福井土塁E［53］・h ラインの中間地点において東西に延びる細長い畝のラインがみえる。宮田氏の聞き取り（宮田 2010ｂ）と合わせて、これが多重土塁線であったと判断できる。北側の福井土塁Ｅと連動して尾根を取り囲む。

j 地点

現状は会社敷地や道路が横切っているが、一部藪状となっている。地籍図によると、福井土塁Ｌ［60］延長上に南東に延びる田と山との境界線及び山の地割がみられる。昭和 22 年米軍撮影の空中写真及び昭和 38 年国土地理院撮影の空中写真（写真図版４・８）には、この部分に細長い畝のラインがみられる。これらのことから、このラインが多重土塁の痕跡である可能性が考えられる。

k 地点

現状は会社や郵便局の敷地となっている。昭和 22 年米軍撮影の空中写真及び昭和 38 年国土地理院撮影の空中写真（写真図版４・８）によると、福井土塁M［61］の東端で北に折れる福井城山土塁［62］・二位谷土塁Ｂ［64］をつなぐ細いラインがみえる。地籍図にも細い山として表現され、三木山官林と別所村小林字宿谷北の境界線を兼ねていたことが分かる。

l 地点

現状は団地裏側の道となっている。昭和 38 年国土地理院撮影の空中写真（写真図版８）によると、二位谷土塁Ｂ［64］の延長線において、細い道と思われるラインがみえる。地籍図では北東部分で細い山の地割が確認できる。これらのことから、この部分が多重土塁であった可能性が考えられる。三木山官林と別所村小林字釜ヶ谷の境界線を兼ねていたことが分かる。享保元年（1716）『播州三木郡前田町絵図』（写真図版１）によると、多重土塁外側ラインを指す「大辻」のラインの北東端に一致しているとみてよい。

なお、これより北東の宿原土塁[65]との間には積極的に多重土塁と認められる痕跡はみられない。

（3）多重土塁線の考察

遺跡として把握されている多重土塁と推定復元した多重土塁を合わせて、多重土塁線の考察を行う。

西端から東端の順に説明する。まず、法界寺山ノ上付城[18]と接続する形で南東へ朝日ヶ丘土塁[35]（図版11）が築かれている。４重の土塁線で構成されており、最も良好に残っている。朝日ヶ丘土塁はａラインとつながりその外側土塁線が『播州三木城地図』に描かれている「納戸口」とつながっていたとみられる。ａラインは道を取り込むかたちで多重に延び、内側土塁線が高木大塚城［19］と接続していたと考えられる。

高木大塚城［19］と高木大山付城[20]の間は、高木大塚土塁[36]（図版13）とｂラインが道を取り込むかたちで二重に延びて接続していたと考えられる。ｂ内側土塁線が高木大山土塁Ａ［37］（図版14）とつながり、高木大山付城［20］と一体となっていたと考えられる。外側土塁線は高木大山土塁Ｄ［40］（図版14）に接続する。

内側土塁線は高木大山土塁Ａ～Ｃ[37～39]（図版14）及びｃ内側ライン、外側土塁線は高木大山土塁Ｄ[40]・ｃ外側ライン、高木大山土塁Ｅ・Ｆ［41・42］が続く。土塁間の中央にはａ地区から続く道が通る。

高木大山土塁Ｃ［39］から続く内側土塁線はｃ内側ラインにみえるように南側延長線が途中で南南西に針路を変えて三叉路付近で東へ折れて台地縁に延び、その後南東に向きを変えて延びていく。そして、谷を挟んで台地北縁にｆライン・宿ノ谷土塁［66］が続くとみられる。

外側土塁線は、谷を隔てて高木大山土塁Ｇ［43］とｄラインが南へ延び、円状の高まりで東南東へ折れてＡ道を挟んで途中でわずかに南へ一折れして、小林土塁Ａ［44］に続く。その先は南側にわずかに位置を変えて小林土塁Ｂ［45］が東へ延び、その屈曲部内側に円状の高まりを配していたとみられる。ｄライン西端のそれと合わせて櫓台状の施設であった可能性がある。その続きは、Ｂ道を挟んでｅライン・小林土塁Ｃ［46］とつながり、細谷池を形成する谷の手前まで延びていたと考えられる。

細谷池以東の内側土塁線については、福井土塁Ａ[49]（図版18）、Ｃ道を挟んで東へ福井土塁Ｂ[50]（図版18）、谷を挟んで尾根の北縁に福井土塁Ｃ[51]（図版18）とｈライン北側、谷を挟んで尾根上に福井土塁Ｅ[53]（図版19）と続き、谷を挟んだ延長線上に小林八幡神社付城[23]が接する。福井土塁Ｅ［53］は、ｉラインとともに尾根上を画し、広い空間を確保している。

細谷池以東の外側土塁線については、台地上の小林土塁Ｄ[47]、その南側に隣接する小林土塁Ｅ[48]が東へ延びる。Ｃ道を挟んでその先はｇラインが谷を取り囲むように台地縁をめぐる。ｈライン南側は、福井土塁Ｄ［52］（図版18）を取り込み、福井土塁Ｇ［55］（図版20）、福井土塁Ｈ［56］と接続し、小林八幡神社付城[23]の南側に至る。なお、ｈライン南側に福井土塁Ｆ［54］がみられ、福井土塁Ｇ［55］と接続していた可能性がある。

小林八幡神社付城［23］以東の多重土塁については、外側土塁線のｈラインと接続して福井土塁Ｉ［57］（図版20）が北北東に延び内側土塁線と合流する。福井土塁Ｉ［57］は北側で東に土塁が分岐して続いている。内側土塁線の延長線上には福井土塁Ｊ～Ｌ[58～60]（図版20）が台地北縁沿いに延び、ｊラインが台地縁沿いに南東へ続く。谷を挟んだ北側の台地南縁に福井土塁Ｍ[61]があり、Ｄ道を挟んで北へ折れて道と並行してｋライン、福井城山土塁［62］（図版21）が延び、北東へ方位を変えてＥ道を挟んで二位谷土塁Ｂ［64］（図版21）、ｌラインが延び釜ヶ谷池手前まで続く。ｌラインの先は不明であり、北北東へ約1.2㎞離れた台地端に宿原土塁［65］（図版21）が位置している。

以上が多重土塁線の全容である。付城が基本的に内側土塁線と連結していること、Ａ～Ｅ道を縦断し、特にａラインからｆラインにかけて二重の多重土塁が延びて道を取り込んでいたこと、多重土塁線の多くが台地縁に築かれていたことが判明した。三木城へと続く街道を押さえ込み、谷からの侵入を防ぎ、要所にはより安全な内側土塁線に基本的に接続するかたちで付城を配置して、兵糧攻めを貫徹させていった様相が読み取れる[30]。

なお、内側土塁線と外側土塁線の間の空間については、幅約50～200mとなっている。面的に発掘調査した高木大塚土塁と福井土塁Ｅでは、当時の遺構は全く検出されなかった（三木市教育委員会2000ｂ・2000ｃ・2010）。

基本的には敵に備える空間であるとともに、通路兼駐屯部としての利用が想定される。

5　まとめ

織田方が三木城周辺に築いた付城は、文献史料から第１期（天正６年〈1578〉７月末～８月中旬）・第２期（同７年４月）の付城は織田信忠によるものであり、第３期（同７年 10 月）の付城が羽柴秀吉によるものであることが明らかとなった。多重土塁の構築時期については、第２期の付城群との一体性からこれら付城と同時か、『播州御征伐之事』の記述から同７年６月頃の両方の可能性を想定すべきであろう。

第１期と考えられる三木城から美嚢川を隔て北の山上に位置する付城は、山の地形に合わせて曲輪を上下に連ねる構造のものが多く、背後の尾根続きに対して、堀切などがほとんど見られず、遮断防御はあまり意識していない。これは、美嚢川を隔てており、比較的安全な地域に築かれたためと考えられる。

一方、第２期と考えられる三木城の南の山上に位置する付城は、平坦な尾根・丘上に立地し付城間を多重土塁で連結している。櫓台を備える土塁囲みの主郭に、複雑な虎口が設けられているものが主流である。周囲に軍勢の駐屯用の曲輪を付属させるなど、主郭に対して求心的な構造を基本とする。これらは、毛利方が明石魚住から三木城へ兵糧を搬入するのを防ぐための最前線であるため、より高度な築城技術が用いられたものと考えられる。

第３期に築かれたと考えられる付城は、八幡山・二位谷奥の尾根全体を城郭化した大軍勢が駐屯可能な付城を中心とし、主要街道を押さえるという、力攻めを意識したまさに最前線の付城群と評価できる。

以上のように、織田方による三木城攻めは、合戦の進捗に応じた戦略を持って、現地に派遣、配置された部将たちがそれに適した付城群・多重土塁を構築し包囲網をより強固なものにしていき、「三木の干し殺し」を完結させたのである。そして、秀吉はこの経験を生かし、同９年の鳥取城攻め、同 10 年の備中高松城攻めに勝利し、さらに同11年信長亡き後の後継者争いである賤ヶ岳の戦にも勝利し、天下統一への道を歩んでいったのである。

以上のとおり、三木合戦関連遺跡群はその多くが現存し、文献史料と遺跡によって、合戦の過程や全容を正確に把握することができるという、全国的に見ても稀有な遺跡群といえる。そのことは、織豊系城郭の発達過程や当時の合戦のあり方を知る上でも、欠かすことができない重要な研究資料であることをも意味する。さらに、織豊期における本格的な包囲網戦における付城間を結ぶ多重による封鎖遺構を数多く残す唯一といえる事例であることからも、極めて貴重な遺跡群であり、その歴史的価値は高いといえよう。

三木市としては、歴史に残る三木城跡及び織田方が築いた付城跡群・多重土塁を市民の貴重な財産として、後世に保存、継承するとともに、歴史の継承、市民の憩いの場の創出、まちの活性化に取り組むことを通して、まちの魅力を全国に伝え、市民の夢を育み、誇りとなるような三木のまちづくりを進めていきたい。

註

1）「播州御征伐之事」『群書類従』21（『報告書』史料編（以下、「史料編」とする）50 頁所収）。

2）（天正６年）３月 22 日付け「小寺官兵衛宛織田信長朱印状」『黒田文書』（史料編 53 頁所収）。

3）「惺窩先生系譜略」『続々群書類従』13（史料編 54 頁所収）。

4）（天正６年）４月 17 日付け「別所重棟宛村上頼家・長束新三郎連署書状」『清水寺文書』（史料編 55 頁所収）。

5）「信長公記」天正６年６月 16 日条（史料編 57 頁所収）。

6）「信長公記」天正６年６月 26 日条（史料編 57・58 頁所収）。

7）「信長公記」天正６年６月 26 日条以下（史料編 57～60 頁所収）、（天正６年）７月７日付け「紀州惣門徒中宛本願寺顕如書状」『念誓寺文書』（史料編 58 頁所収）。

8）「信長公記」天正6年7月15日条以下（史料編59・60頁所収）。

9）（天正6年）7月16日付け「新免宗貫宛羽柴秀吉書状」『新免文書』（史料編60頁所収）。

10）「豊鑑」天正6年8月条　『群書類従』20（史料編61頁所収）。なお、「豊鑑」は信頼性があまり高くない史料とされていることから、本稿では他の史料と比較分析した上で、引用することとする。

11）「信長公記」天正6年8月17日条（史料編61頁所収）。

12）「播州御征伐之事」（史料編62頁所収）。

13）（天正7年）2月23日付け「鳥居安芸守他宛羽柴秀吉書状」『大阪城天守閣収集文書』（史料編67頁所収）。

14）「信長公記」天正7年4月8日条以下（史料編68頁所収）。

15）「信長公記」天正7年4月26日条（史料編68頁所収）。

16）「播州御征伐之事」（史料編69頁所収）、「信長公記」天正7年5月25日条以下（史料編69頁所収）。

17）「播州御征伐之事」（史料編72頁所収）。

18）「信長公記」天正7年6月22日条（史料編71頁所収）。

19）「播州御征伐之事」（史料編72頁所収）、「信長公記」天正7年9月10日条（史料編72・73頁所収）。

20）「播州御征伐之事」天正7年10月7日条（史料編74頁所収）。

21）（天正7年）10月28日付け「小寺休夢斎宛羽柴秀吉書状写」『黒田文書』（史料編74・75頁所収）。

22）（天正8年）正月14日付け「赤佐佐衛門尉宛羽柴秀吉書状」『反町文書』（史料編77頁所収）。

23）「播州御征伐之事」（史料編78・79頁所収）、「信長公記」天正8年正月15日条以下（史料編78・79頁所収）。

24）三木合戦の最期については、『報告書』において、小林基伸委員は長治自害後に大量殺りくが行われた可能性が高いとしている（小林 2010）。これに対し、三木市教育委員会としては、これまでの定説を含めて今後多角的に検証していく必要性を指摘している（三木市教育委員会 2011）。

25）そのほかに、三木合戦の際の織田方の陣城の可能性が指摘されている城として野村城（加古川市）と三津田城（三木市）があげられる。野村城は三木城から南西に約7km離れた三木市との境に位置する。城主は織田方の宮部善祥坊と伝わる。在地勢力の城を陣城として改修を加えたもので、兵糧搬入阻止とともに湯ノ山街道の流通封鎖を目指したとされる（多田 1991）。三津田城は三木城の東約7kmに所在する。城主は有馬則頼と伝わる。三木合戦の際は織田方に属していた。三木城東側の補給ルートを押さえる広域拠点として、野村城と同様の役割を担った可能性が指摘されている（多田 1991）。本稿では、より直接的に三木城包囲網戦に使用されたと考えられる付城のみを対象とする。

26）なお、城域画定は、基本的に堀や土塁で城域が画されている場合、その外側端を境とした。切岸で城域が画されている場合は、切岸と自然斜面の見分けが容易ではないことから、便宜上曲輪端を境とした。なお、面積算出は、測量ソフト「WingNeo」を用い、CAD 上で城域ラインをなぞって測定する方法を用いた。ただし、区画が確認できない駐屯部の存在が想定され、その部分の面積算出ができないことから、あくまで一応の目安として提示することとする。

27）類似例として、虎御前山砦（滋賀県長浜市）があげられる。当城は元亀3年（1572）に織田方による浅井氏居城である小谷城攻めの際に築かれ、小谷城に対して谷を挟んだ最前線の山上に立地している。山頂部の主郭を中心として、約1kmに及ぶ尾根上に曲輪群を連ねている。主郭には外枡形状の虎口を設け、主郭の優位性を確保している。主郭は信長が在陣し、ピークごとに各部将が配置されていたようである（髙田 2006）。防御性よりも最前線において力攻めを行うための大軍勢を駐屯させることを重視した陣城と評価できる。

28）ただし、図面上での復元案を提示しなかったため、一般的には理解しにくい内容となった感は否めない。

29）fライン東側に続く土塁については、平成11年度に実施した発掘調査によると、土塁が旧表土の上面から築かれていたことが判明したため、調査担当者は近現代盛土と判断した。しかし、この旧表土が三木合戦当時のものである可能性は否定しきれず、現

状でも谷側に人工的な切岸がみられることから、本稿では多重土塁（宿ノ谷土塁［66］）とひとまず判断したい。

30）視点を変えると、外側土塁線が明治期の植生林境とほぼ一致していることが確認できた。このことから、これより内側が天正８年以降公の土地となり、近世から近代へと引き継がれたと判断できる。多重土塁は合戦時に築かれた臨時的施設であったにも関わらず、境界線を示すものとして転用されたことは非常に興味深いものといえる。多重土塁の多くが現存ないし昭和40年代以降の開発前まで良好に残存していた事実は、このような理由があったからなのであろう。

引用文献

金松誠・廣井愛邦　2010　「三木城跡・付城跡群・多重土塁の発掘調査の成果」『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』　三木市教育委員会

小林基伸　2010　「三木合戦の経緯」『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』　三木市教育委員会

高田徹　2006　「虎御前山砦」『近江の山城ベスト50を歩く』　サンライズ出版

2007　「信長・秀吉・家康の築いた陣城」『信長・秀吉・家康の城』　新人物往来社

多田暢久　1989　「陣城プランの特徴について－賤ヶ岳陣城群を中心に－」『近江の城』　近江の城友の会

1991　「播磨野村城の縄張りについて－三木合戦における陣城の構造－」『歴史と神戸』30－６　神戸史学会

2001　「織豊期城郭における軽量礎石建物について－近畿地域の陣城事例を中心に－」『織豊城郭』８　織豊期城郭研究会

筒井俊雄・山本昇　2002　『三木町明治初年古地図』　ギャラリー湯の山みち

兵庫県教育委員会　1982　『兵庫県の中世城館・荘園遺跡－兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1995　『三木市加佐山城跡・慈眼寺山城跡』　兵庫県教育委員会

兵庫県立考古博物館　2011　『吉田住吉山遺跡群』　兵庫県教育委員会

兵庫考古学研究会　1998　『播磨三木城攻め付城二位谷奥付城現地説明会資料』

平野庸脩　1975　『播磨鑑』全　歴史図書社

松林靖明・山上登志美　1996　『別所氏－研究と資料－』　和泉書院

三木郷土史の会　2002　『三木市有宝蔵文書』別巻　三木市

三木市教育委員会　1999　「八幡谷ノ上男石道付城発掘調査概要」『社会教育活動状況報告書』平成10年度

2000ａ　『三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書』Ⅱ

2000ｂ　『高木古墳群・高木多重土塁』１

2000ｃ　『高木古墳群・高木多重土塁』２

2001　『三木市遺跡分布地図』

2010　『福井土塁Ｅ遺跡』

2011　『三木合戦を知る』

三木城跡及び付城跡群学術調査検討委員会　2010　『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』　三木市教育委員会

三木城復興の会　1993　『播州三木城地図』

宮田逸民　1981　「平井山本陣」『日本城郭大系』12　新人物往来社

1982　「播州平井山砦城－三木合戦における秀吉の陣所－」『賀毛』９　賀毛郷土研究会

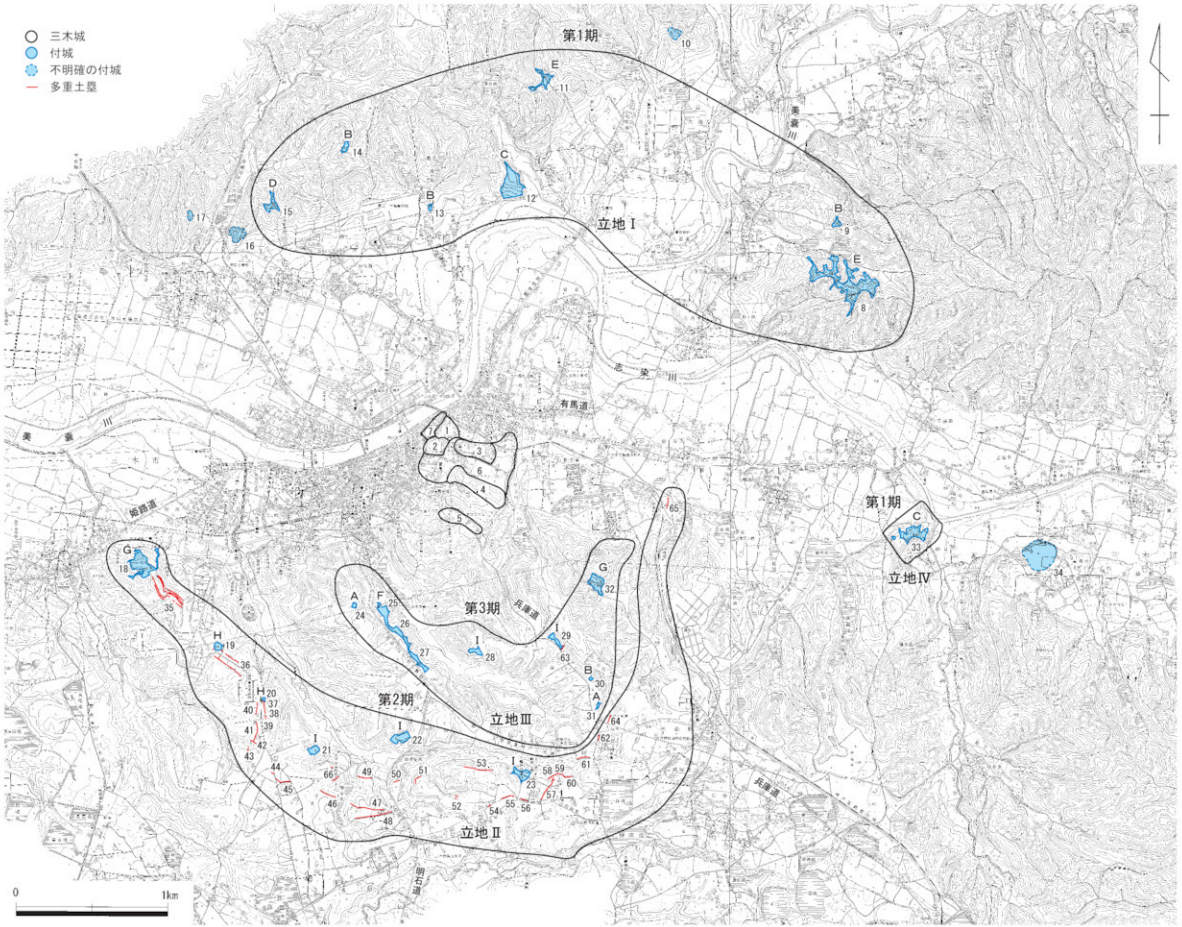
1991　「織田政権と三木城包囲網－秀吉による「三木の干殺し」の検証－」『歴史と神戸』30－６　神戸史学会

2010ａ　「三木城跡・付城跡群・多重土塁の縄張りと現状」『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』　三木市教育委員会

2010ｂ　「三木城並びに付城群の考察」『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』　三木市教育委員会

矢守一彦　1981　『浅野文庫蔵諸国古城之図』　新人物往来社

図　版



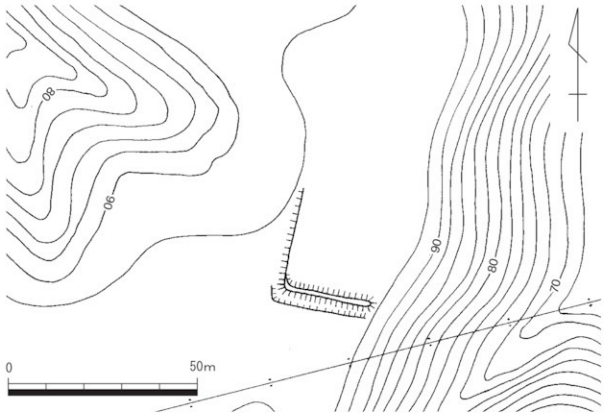
三木城・付城・多重土塁分布図（昭和42年作成　三木市都市計画図〈S＝1/10000〉を使用）

三木城
1 三木城本丸遺跡
2 三木城二の丸遺跡
3 三木城新城遺跡
4 三木城鷹尾山城遺跡
5 宮ノ上要害
6 三木城遺跡
7 本町滑原遺跡

付城
8 平井山ノ上付城跡
9 平井村中村間ノ山付城跡
10 久留美村山上付城跡
11 慈眼寺山城跡
12 久留美村大家内谷上付城跡
13 跡部村山ノ下付城跡
14 加佐山城跡
15 平田村山ノ上付城跡
16 平田村付城跡
17 大村山ノ上付城跡
18 遠田村法界寺山ノ上付城跡
19 高木大塚城跡
20 高木大山付城跡
21 シクノ谷峯構付城跡
22 明石道峯構付城跡
23 小林八幡神社付城跡
24 羽場山上付城跡
25 八幡谷ノ上明石道付城跡A
26 八幡谷ノ上明石道付城跡B
27 八幡谷ノ上明石道付城跡C
28 三谷ノ上付城跡
29 二位谷奥付城跡A
30 二位谷奥付城跡B
31 二位谷奥付城跡C
32 君ヶ峰城跡
33 和田村四合谷村ノ口付城跡
34 高男寺本丸遺跡

多重土塁
35 朝日ヶ丘土塁
36 高木大塚土塁
37 高木大山土塁A
38 高木大山土塁B
39 高木大山土塁C
40 高木大山土塁D
41 高木大山土塁E
42 高木大山土塁F
43 高木大山土塁G
44 小林土塁A
45 小林土塁B
46 小林土塁C
47 小林土塁D
48 小林土塁E
49 福井土塁A
50 福井土塁B
51 福井土塁C
52 福井土塁D
53 福井土塁E
54 福井土塁F
55 福井土塁G
56 福井土塁H
57 福井土塁I
58 福井土塁J
59 福井土塁K
60 福井土塁L
61 福井土塁M
62 福井城山土塁
63 二位谷土塁A
64 二位谷土塁B
65 宿原土塁
66 宿ノ谷土塁

A

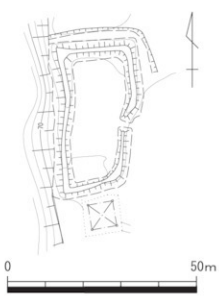


羽場山上付城跡　縄張図（宮田逸民氏作図）

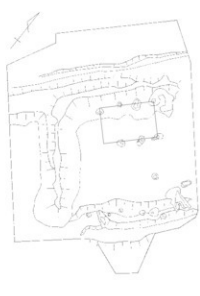
二位谷奥付城跡C　測量図

B

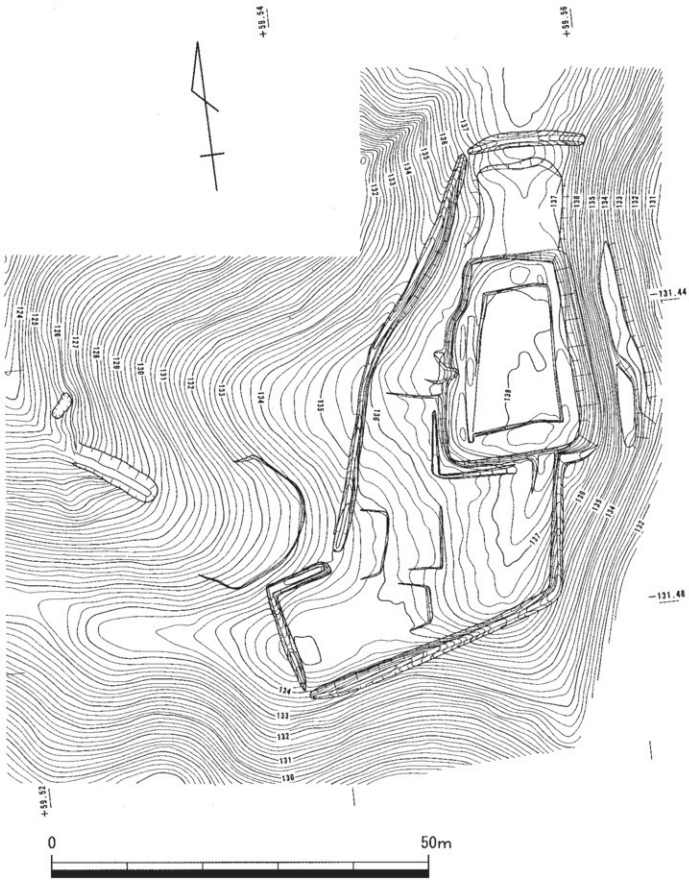
平井村中村間ノ山付城跡　測量図



跡部村山ノ下付城跡　測量図

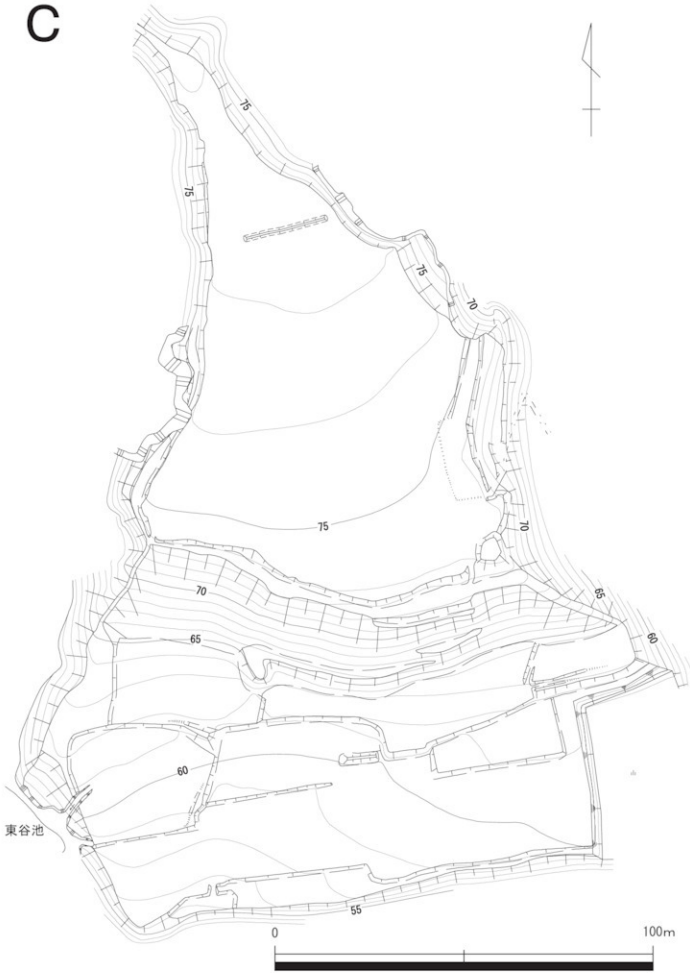


二位谷奥付城跡Ｂ　遺構平面図



加佐山城跡　測量図（兵庫県埋文事務所1995より、一部改変）

C



久留美村大家内谷上付城跡　測量図

和田村四合谷村ノ口付城跡　測量図（兵庫県立考古博物館2011より）

D

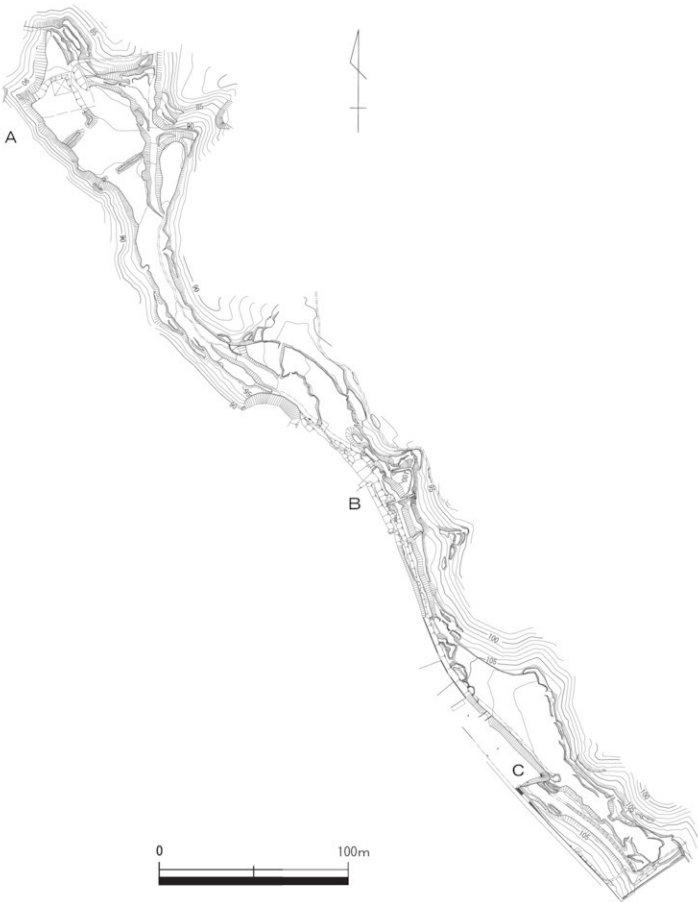
平田村山ノ上付城跡　測量図

E

平井山ノ上付城跡　測量図

慈眼寺山城跡　測量図

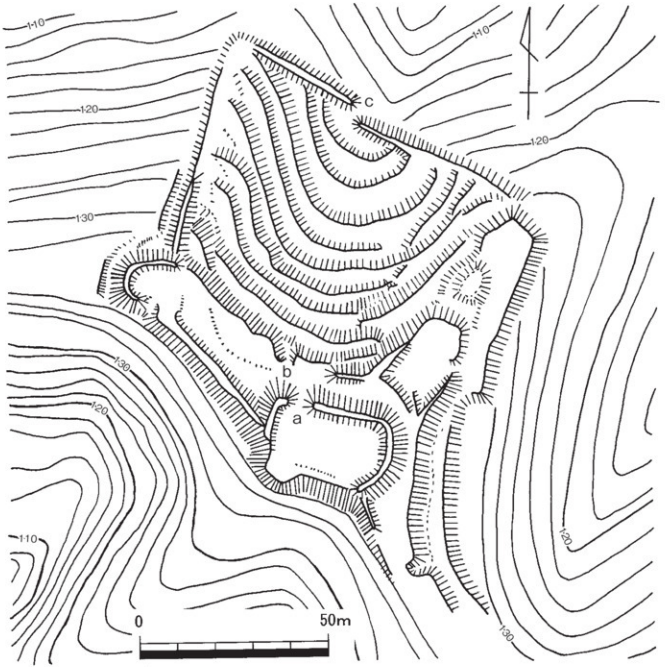
F



八幡谷ノ上明石道付城跡A・B・C　測量図

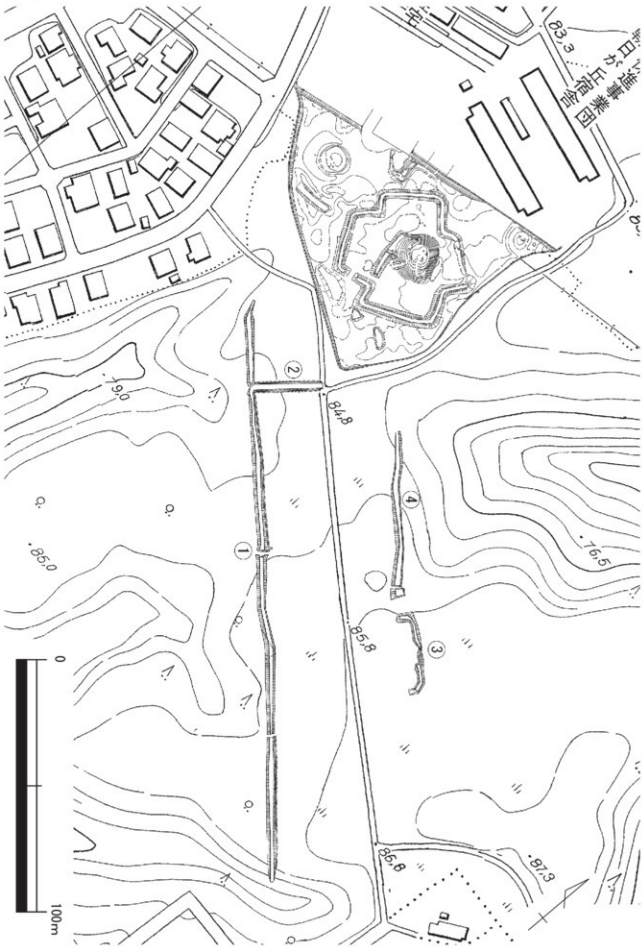
G

法界寺山ノ上付城跡・朝日ヶ丘土塁　測量図

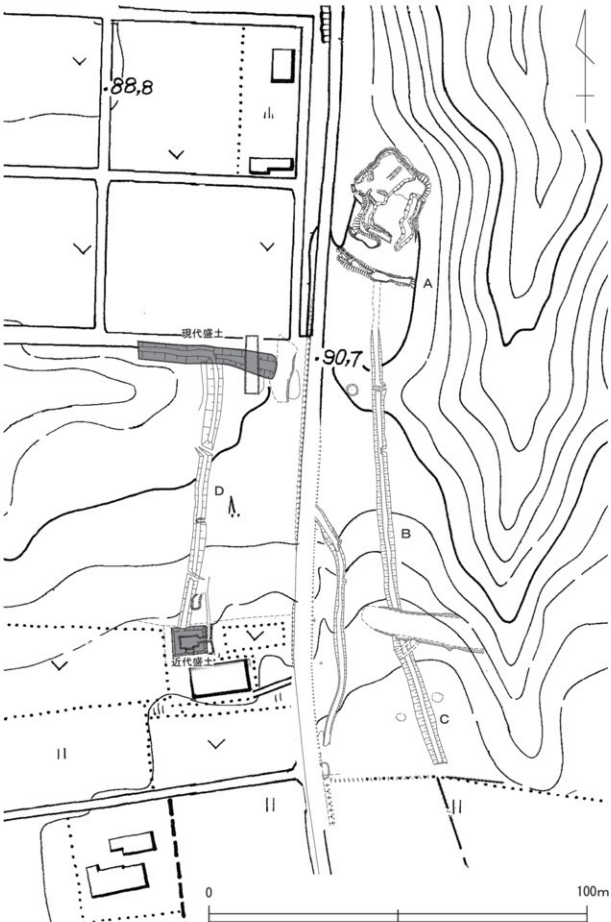


君ヶ峰城跡　縄張図（宮田逸民氏作図）

H

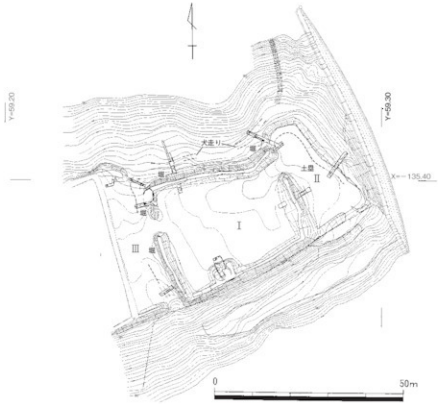


高木大塚城跡・高木大塚土塁　測量図

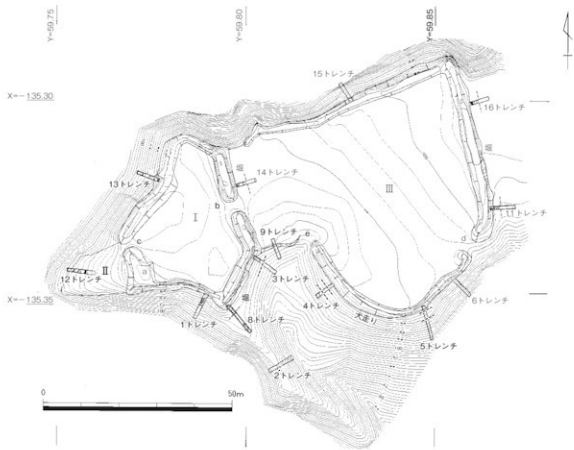


高木大山付城跡・高木大山土塁Ａ～Ｄ　測量図

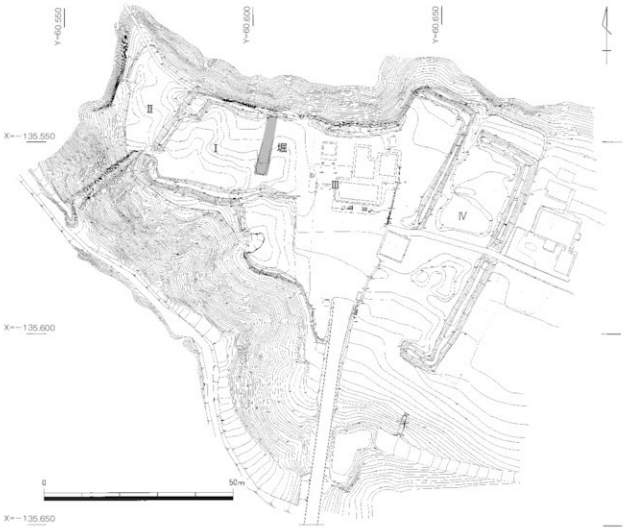
I



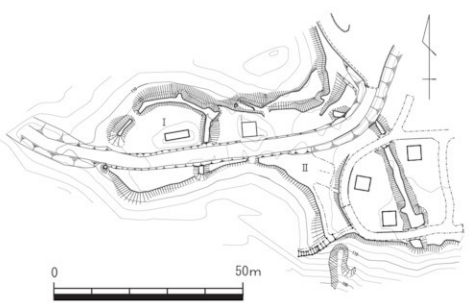
シクノ谷峯構付城跡　遺構平面図



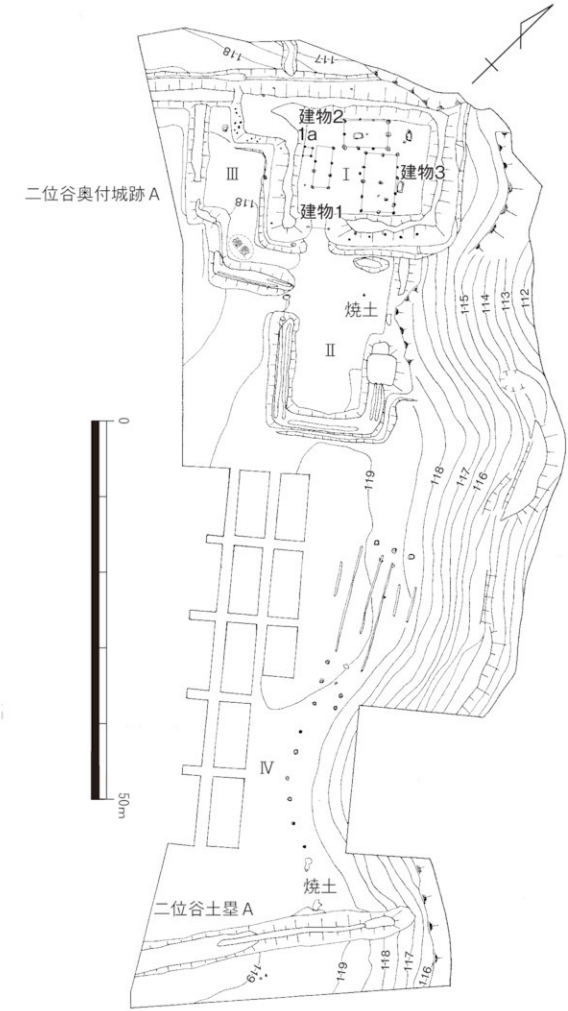
明石道峯構付城跡　遺構平面図



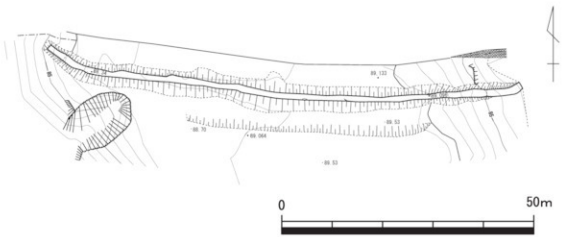
小林八幡神社付城跡　測量図



三谷ノ上付城跡　測量図

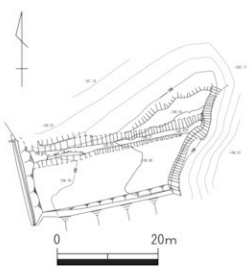


二位谷奥付城跡A・二位谷土塁A　遺構平面図



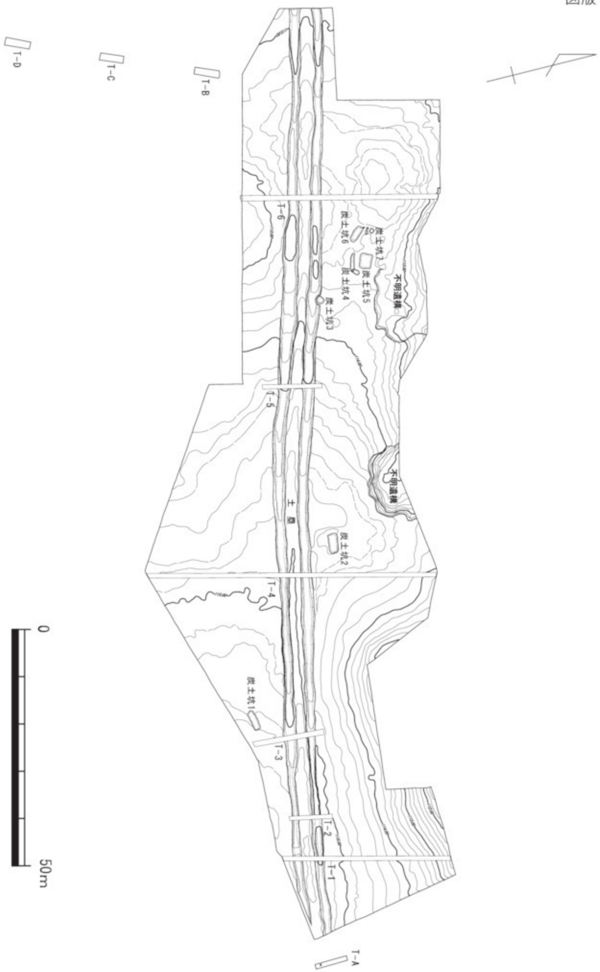
福井土塁A　測量図

福井土塁C　測量図

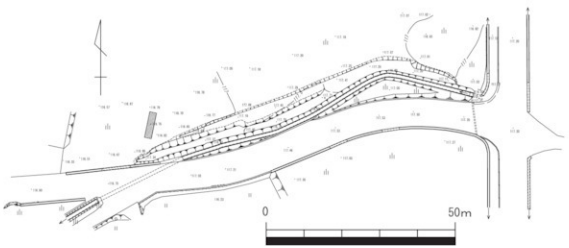


福井土塁B　測量図

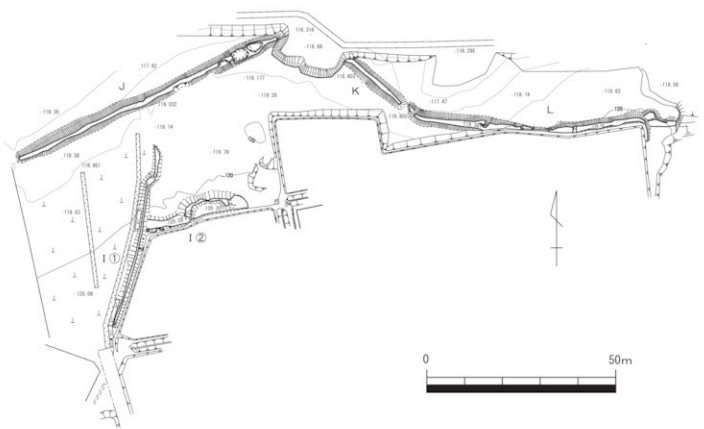
福井土塁D　測量図


T-D
T-C
T-B
T-6
炭土坑6
炭土坑7
炭土坑5
炭土坑4
炭土坑3
不明遺構
T-5
不明遺構
土塁
炭土坑2
T-4
炭土坑1
T-3
T-2
T-1
T-A
0
50m

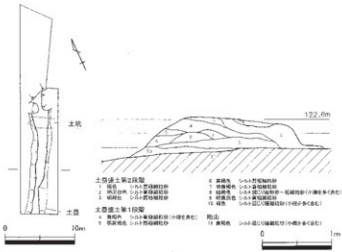
福井土塁Ｅ　遺構平面図



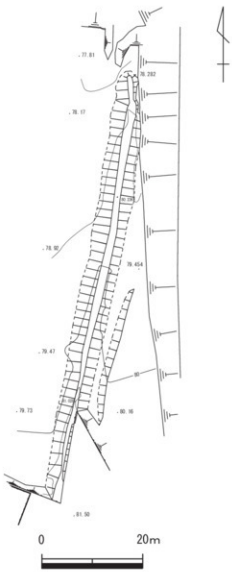
福井土塁G　測量図



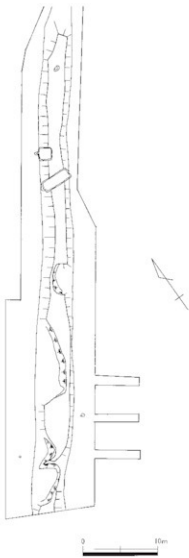
福井土塁Ⅰ～L　測量図



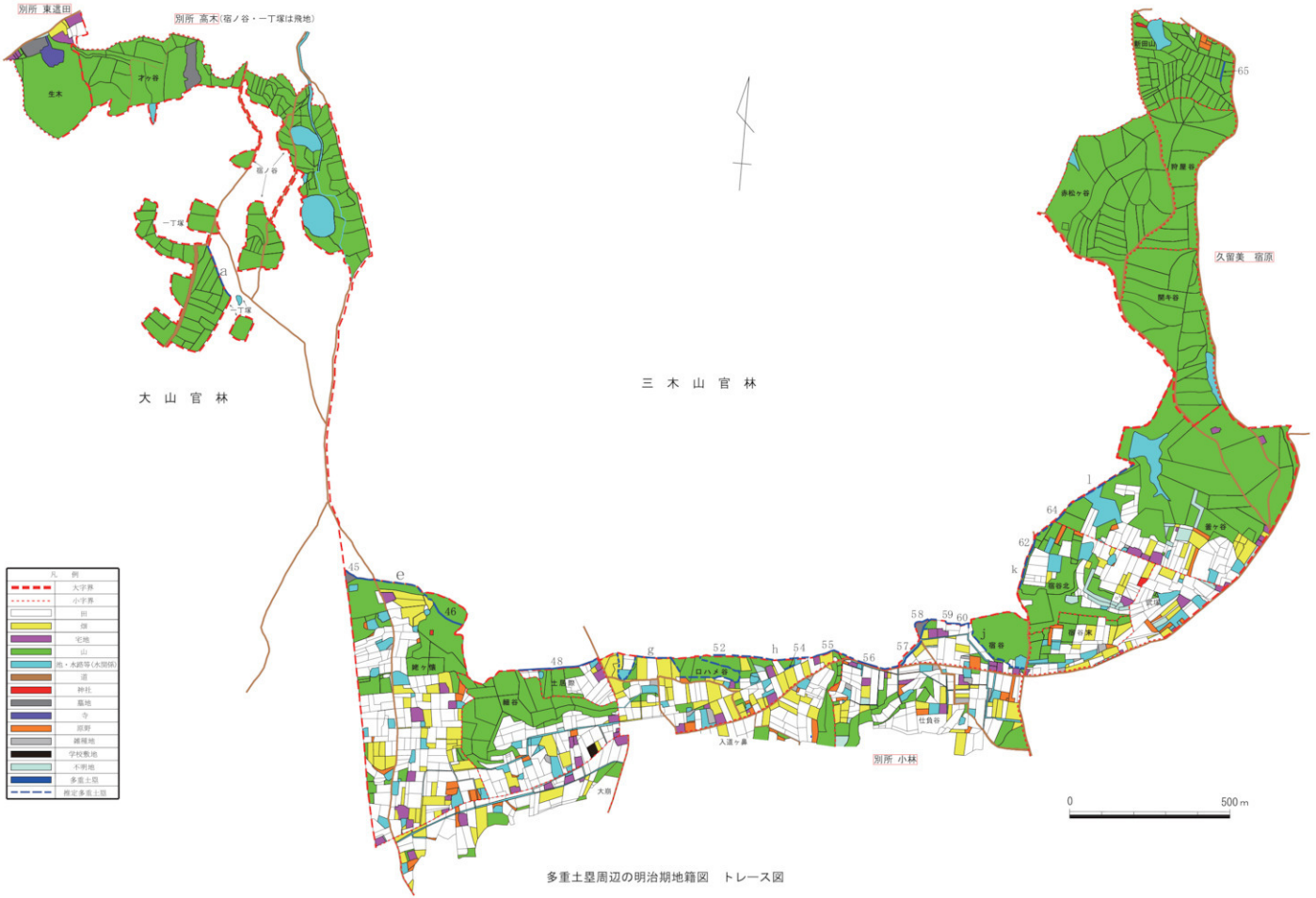
福井城山土塁　遺構平面図・土層断面図
（兵庫県埋文事務所2001より）



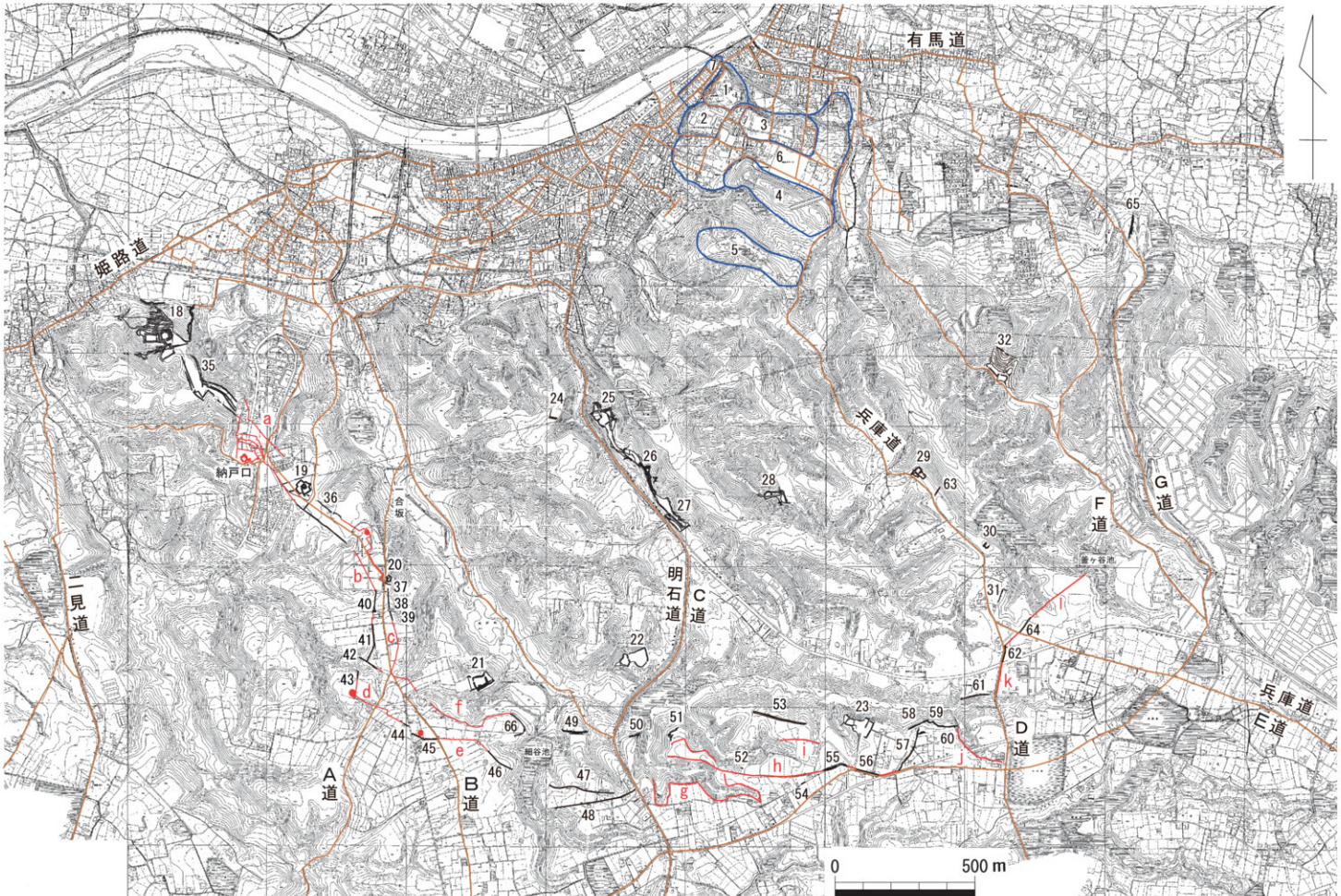
宿原土塁　測量図



二位谷土塁B　遺構平面図



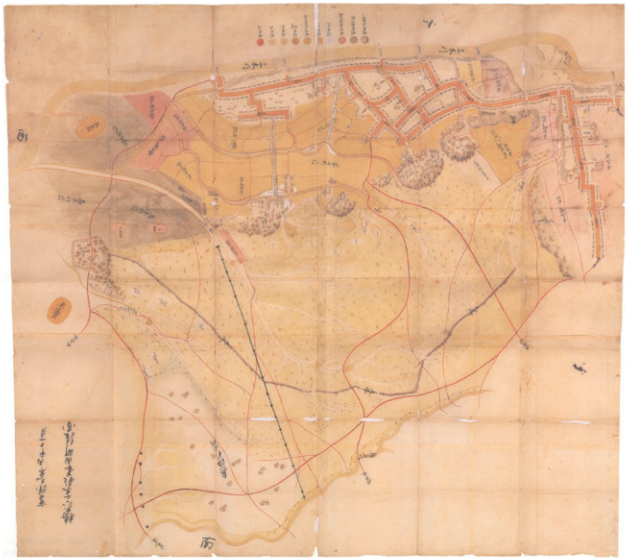
多重土塁周辺の明治期地籍図　トレース図



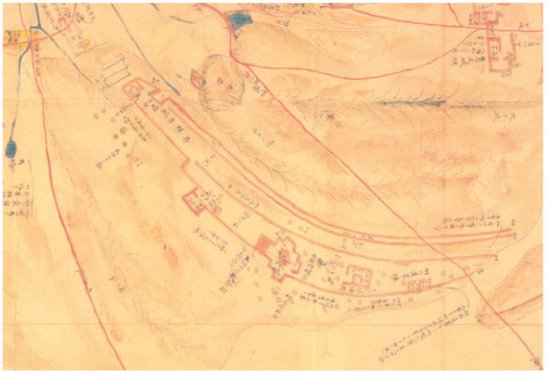
多重土塁・旧道復元図

※この地図は三木市長の承認を得て同市の都市計画図（昭和44年作成　縮尺1/2500）を使用して調製した物です。
〔承認番号　平成24年3月30日三美第215号の1〕

写　真　図　版



播州三木郡前田町絵図（三木市有宝蔵文書　三木市蔵）

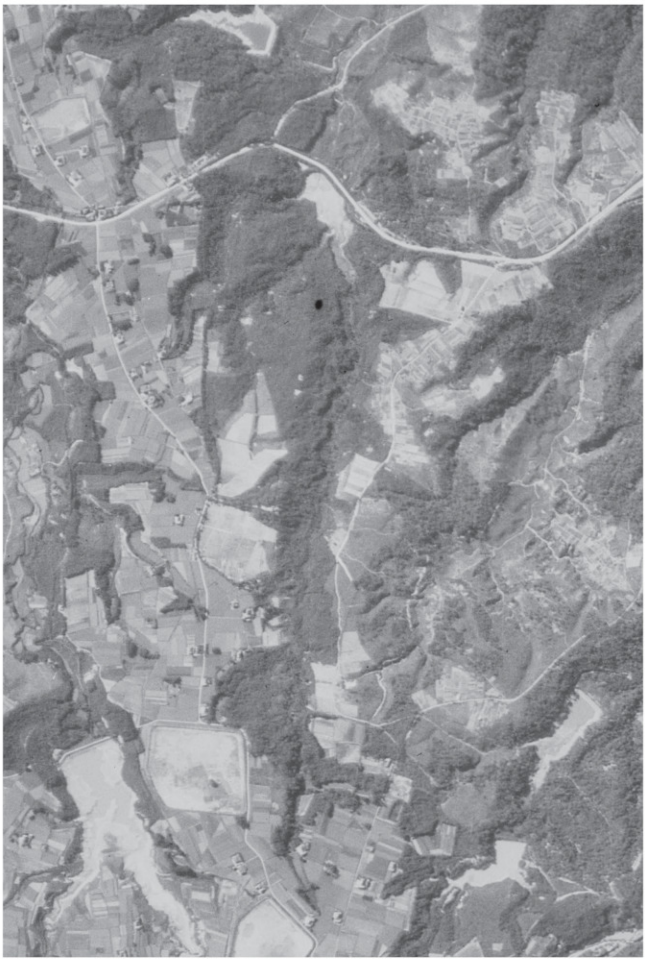


播州三木城地図（多重土塁部分拡大　安藤美枝子氏蔵）

多重土塁空中写真（上が北）（昭和50年国土地理院撮影）

多重土塁空中写真（上が北）（昭和60年国土地理院撮影）

多重土塁空中写真（上が北）（昭和22年米軍撮影）



多重土塁空中写真（右が北）（昭和22年米軍撮影）

多重土塁空中写真（上が北）（昭和36年国土地理院撮影）

多重土塁空中写真（上が北）（昭和38年国土地理院撮影）

多重土塁空中写真（右が北）（昭和38年国土地理院撮影）

多重土塁空中写真（上が北）（昭和38年国土地理院撮影）

三木市文化研究資料　第25集
三木城跡及び付城跡群総合調査報告書
総 括 編

平成２４年３月３１日発行

編集・発行　三 木 市 教 育 委 員 会
〒673-0492
兵庫県三木市上の丸町１０番３０号
印　刷　　小野高速印刷株式会社

表紙写真　「三木合戦軍図」(法界寺蔵)